現代傑作叢書第二編

影と影

影と影

抱月

現代傑作叢書第二編

影と影

島村抱月

目次

劇

平清盛（明治四十四年一月）……五
運命の丘（明治四十四年四月）……六一
海濱の一幕（明治四十四年七月）……九三
復讐（明治四十五年一月）……一〇九
競爭（大正元年十月）……一二九

小說

斷片（大正二年二月）……一五七
柏峠（明治四十四年二月）……一七七
山戀ひ（明治四十年一月）……一九九
小品五篇……二三三
S君　松ヒ案摩　野犬
大晦日　一面

平清盛

平清盛

人物

平清盛（六十二歳）
前右大將宗盛（三十四歳）
佛（二十歳）
妓王（二十二歳）
安部資成
太夫判官季貞
叡山の法師一人
侍士二三人
侍女二三人

場所

京都、西八條、清盛の邸

時

治承四年三月十六日、午後より夜に及ぶ

第一場

上手半面、横ざまに一段高く寢殿の一部を現はす。室内の調度は、すべて平安期の優麗高貴な好み、正面の半を白地薄模様の襖で仕切り、其の奥には、遥か離れて上手から下手へ打ちわたした細殿が廂縁ごしに見える。下手から奥へかけて中庭の景、庭の中央に櫻の大木二三株、花が丁度眞盛りである。遲い午後の光線が、おつとりとした暖い色にあたりを包んでゐる。

素絹奴袴で脇息に倚つた清盛を上座にして、一方は薄紅梅の小打着に袴の妓王、及び侍女、法師、一方は侍女、資成、季貞、侍士等宴席の體に居並ぶ。銚子高坏の外、妓王の前に箏を置き、琵琶、笛、鼓等管絃の樂器をそれ〴〵資成、季貞、侍女、侍士等に割りあて、暫時管絃樂の中に、靜に幕を揚げる。やがて奏樂止むと、

法師　まことに心も溶け込むやうでござります。殊に妓王さまのお爪先には辨財天女が宿つてでもござりますか。ありがたい御代に生れ合はせて、不思議の音樂を聞きまする。

清盛　は、、御坊は管絃に呑まれたと見える。この淨海もな、管絃の遊びは好むが、しかし箏笛の調べを不思議だなどゝは思はぬ。絲を彈くのが箏で、管を吹くのが笛だ。たわいは無い。面しろいといふのは、あれはみんな、聞く人の心からよ。自分の身がおもしろければ面白い、自分の身が悲しければ悲しい。此の世は天晴淨海が世だと思ふと、其の心を調べて呉れるから管絃が面しろく聞かれる。御坊なぞは、何時も菩薩や天女と往來して居るから、それ

で此女が爪音にも極樂淨土の不思議な音樂を感じたのだらう。

妓王　でも上樣にも、此の節は管絃を聞いてお欝ぎ遊ばす事がございます。わたしはあれが心がゝりでなりませぬ。

清盛　（やゝ沈吟して）ふむ、そちにもさういふ事が分るか。わしも此の頃は氣が弱くなつてな。……ま、やめい〳〵。今のわしが身の上に、欝ぎの種は無い筈だ。いま日本の天下は、わしが威光で光つて居る。なう、妓王、そちとても、わしが寵愛してやればこそ、それ程美しく見えるのであらうがや。

妓王

それは上樣の御威光でございますもの、その前に出ましたら、何んな者でも消押されて了ひます。それでも妓王にはまた妓王の好い所が……幾らかあるとは思召しませぬか。ほゝ、上樣、さうでございませう？

清盛　いや、さうでない〳〵。わしの物だと思ふから美しいのだ。さう思ふと、咲き盛つた櫻の花よりも、暖いそちの肌の色が遙に美しいぞ。もつとも、好い女子だけは、他の物だと思ふと、尙よく見えることもある。えゝ？。妓王なども何であらう、若い男を見て、さういふ心を起こすことがあらう。

妓王

わたくしは、唯もう上様の大きなお光に包まれて、外のものは何も目に入りませぬ。斯うしてじつと、お惠みに身を任せて居りまするば、此の上慾しいと思ふ願は一つも起こりませぬ。たゞ此のやうな身に餘る榮華が何時まで續きますかと、それが氣がゝりでございます。

清盛　（つくゞゝと見て）
そちは何時も心元なさうな奴だな。ちやうどあの花のやうな奴だ。見事は見事だが、今にも散りさうで、手が離されぬ。わしまでが何うかすると釣り込まれて、一緒に心元ない思ひをする。もつと近う寄れ、さあ一つ飲め。わしはな、そち達のやうに、一寸すると、もう直ぐ此の世の事にあきらめをつけて、此の上望みは無

いなどゝ、縮こまつて了ふことは嫌だ。そち達も、わしの側にさへ居れば少しも氣づかふ事は無い。平家の家運は千萬年だ。なう、資成。

資成
あの櫻を見るにつけましても、誠に世は平家の天下でございます。

法師
しかし、あの櫻は今が眞つ盛りと見えますから、やがてもう、散るかも知れませぬ。

資成　（眼で制しながら）
これ〳〵、何で其のやうな不祥な事をおつしやる。

法師

いや、御當家の御代はさうではござりますまいと申すので。

清盛　なう、御坊、考へもて見い。保元平治このかた、此の入道は隨分身を棄てゝ上へ御奉公をして居る。さればこそ、跡の月には新御門もいよ〳〵御即位で、當家は准三后の宣旨を蒙つた。鹿が谷の一類、法皇の御謀計でさへ、此の淨海には敵はぬでないか。法皇さまの烏羽にお在すのを、世間では何かと言ふさうだが、淨海の身にもなつて見て呉れい。あれほど長いお馴染でありながら、つまらぬ奴等の口車に乘つて、當家を亡さうとなされる。それもお上へなら、此淨海が首一つ差し上げて、少しも惜しいとは思はぬが、お上といふのは上部のこと、裏には當家の繁昌を嫉む輩が牙

を磨いで待つて居る。當家が亡びれば、其等のものゝ天下になるのだ。なう御坊、それでも、わしは、負けて居らねばならぬだらうか。

法師　御もつともと存じます。たゞ、天下を身方になされて、佛法王法の憎しみをお受けなされぬ御用心が……。

清盛　やめい〳〵。此の淨海が生きて居る限りは、日本國中、當家に指を差すものは一人も居らぬ。

（此の時取次の侍士が出て來る。）

取次

先程から白拍子の佛と申すものがお車寄に參つて居りますが、是非一度お上へお目通り致したいと申し張つて、何と叱つても歸りませぬ。如何いたしませうか。

季貞　これ〳〵御前へさやうな推參な事を申し上げるとは何うしたものだ。狂人であらうから、早く引き出させい。

侍士の一人　私共が參つて引立てませう。

（二三人の侍士立ちかゝる）

取次　（押し止めて）いや、引き立てますに世話はございませぬ。どうか其のまゝになさいませ。

（立つて行かうとする）

妓王　まあ、待つて下さいませ。上様、あの、佛と申しますのは、此の頃洛中に名高い舞の名人でございませう。白拍子と申せば、わたしとても同じ身の上でございます。折角慕うて參つたものを、すげなくお歸しなさるのが本意でもございますまい。呼び入れておやりなさいませ。

清盛　いや、ならぬ。そちが居る西八條へ、何うしてうさいふ者が推しかけて參つたか。不埒だ。神と言はうが、佛と言はうが、妓王の

居る所へは足踏みもかなはぬと、早くさう言へ。

妓王　いえ〳〵わたしへ義理をお立て下さるのは嬉しうございますが、お願でございます。どうか呼んでやつて下さいませ。佛御前とやらを、わたしも見たうございます。

清盛　は、、遠慮をするな。そちに義理を立てるのでは無い。わしが、そちより外の女子は見たう無いからだ。追ひ返せ〳〵。

取次　はつ。

（立つて行く）

妓王　女子の身を追ひ立て、、恥をおかゝせなさるのは、むごうございます。召しかへして、せめて御對面ばかりでもしてやつて下さいませ。妓王が居て歸したと申されては、わたしの女が立ちませぬ。

資成　資成どの、何うぞ止めて下さいませ。

資成　ごもつともではございますが……

（立ちかけてもぢ〳〵する）

清盛　よし〳〵。呼び返してやれ。

かしこまりました。

（急ぎ足に出て行く）

清盛　さあ、妓王、近う寄れ。斯う並んで居て、佛とやらを見てやらう。

妓王　（清盛の側に近く寄る。清盛其の手を取る。）

ほゝ、上様。佛御前がわたしよりも美したかつたら、わたしは何うなるのでございませう。

清盛　そちより美しい女子が、日本國はおろか、唐にも天竺にも居る筈はない。安心して居れ。

（資成、佛をつれて登場。佛、萠黄地に蝶の亂模様の小打着袴の風俗で下手に平伏する）

資成　車に乘つて歸りかけました所を、呼び戻して召しつれました。

清盛　佛とやら、よく聞けよ。わしはな、そち等がやうな推參者に會ふ筈では無かつたが、こゝに居る妓王がたつてと申すから會うてやる。顔を上げて見せい。

佛　（顔を上げ、大膽にじつと清盛を見て）

はい、瞑加でございます。

清盛　（始めて佛の顔を熟視し、其の美貌に驚き、取つてゐた妓王の手を放す）

おゝ、もつと近う進め。なう妓王、參つた上は、今様でも一つ歌

はせうか。

妓王（佛の顔を見つめ、悄然として）

聞かせて下さいませ。

佛

音に聞こえた妓王御前のお目通りで、何で、わたくし風情が歌ごころでございませう、おなぶり遊ばすな。

妓王

いゝえ、其の御卑下には及びませぬ。わたしも是非聞きたうございます。

清盛

さうだ〳〵。辭退には及ばぬ。さ、早く歌うて聞かせい。

佛（じつと妓王を見つめる、妓王臆して俯く）

ではお許し下さいませ。

（きつと身構をし、繪扇を顔の前にかざして）

『君をはじめて見る時は、千代も經ぬべし姫小松、お前の池の龜岡に、鶴こそ群れゐて遊ぶめれ』

（この歌を三度繰り返す。一座感嘆する）

清盛

お、、そちは今様が上手だな。妓王にも劣らぬ好い聲だ。殊にわしが上を祝うた歌が氣に入つた。この分なら舞も定めて上手であらう。此の杯を飲み乾すから、さあ、一さし舞うて見せい。

（佛、無言のまゝ眼元に媚を寄せて清盛の顔を見、會釋して次の間へ立つ）

清盛　それ皆のもの、廂へ出い。おゝ、御坊は鼓が上手だと聞いた。ちやうどよい。舞に合せて一つ打つて聞かせい。資成、鼓の仕度だ。

資成　かしこまりました。

法師、辭退し切れずして、鼓を持つて座に就く。一同席を開いて坐り直す。其のあひだ清盛は待ち遠しく落ちつかぬ容子で、立つて居り、妓王は忘れられたやうに、手持無沙汰の體で片隅に坐つてゐる。清盛が次の間の方へ行かうとする途端に、佛、水干を被、舞の仕度で出て來る。)

清盛　やあ、美しい〳〵。妓王よりも美しいぞ。目がさめるやうだ。さあ、一番舞へ。一番舞へ。

佛　(室の中央に立ち、正面を見て身を構へる)

『德是北辰、椿葉影再改、尊猶南面、松花色十廻』

(この朗詠につれて舞ふ。)

清盛　(一心に見とれてゐる樣子、顏に血の色動く)

もうよい〳〵。近う寄れ、こゝへ來い。

佛　(知らぬ振りにて次の責歌を歌ふ)

『よしさらば、心のまゝにつらかれよ、さなきは人の忘れ難きに』

清盛　やあ〳〵。それもわしが事であらうがや。かわいゝ奴だ。わしは入道の身だから、今日からは、さつぱりと佛の御弟子になるぞ。こつちへ來い。

（佛が尙此の歌を繰り返して舞ひつゞけんとする所を、清盛立つて行つて、手を抱き込み、奥へ入る。侍女等ついて這入る。）

資　成　（季貞と顏を見合せて）
飛んだ事になつたぞ。

季　貞
妓王さまがお氣の毒だ。
（皆々妓王の方へ氣を兼ねる）

法　師
あゝ、さま〴〵の世の中ぢや。では皆さま、私は一足お先へ失禮をいたします。

資　成

我々も兎に角下かつて居らうか。

季　貞
それがよからう。皆もさうなさい。
（皆々立つて行かうとする。奥から侍女一人出で來る）

侍　女
大夫判官さま、お召しでございます。

季　貞
あ、まだ御用があつたかな。何であらう。
（考へながら奥へ這入る。侍女も續いて這入る。）

資　成
では我々どもは、あちらで休まう。

（皆々退場）

妓王（わつと泣き伏し、暫くして顔を上げる）

えゝ口惜しい。斯うしては居られぬ。

（血相をかへて立ち上らうとする時、奥から季貞出で來たる。）

季貞

妓王さま、何うなさいます。おかはいさうでございますが、唯今入道さまからお暇が出ました。あなた様お出での限りは、佛御前が御遠慮なさるとかで、早々此の屋敷をお立ち退きなされいとの事でございますぞ。

妓王

えゝ？大夫判官さま、わたしは夢を見て居るのでございませうか。

季貞

夢でも何でもございませぬ。急いでお立ちのきの用意をなさい。

妓王

それにしても、餘まり淺ましい。人の心がさうまざ〳〵と變るものとは、何うしても思はれませぬ。

季貞

そこが入道さまのお氣質とお諦めなさる外はありますまい。今日は一旦お引き下りなされて、入道さまのお心の解ける日をお待ちなさい。茲で何となされうとしても、すべはございませぬ。

妓王（しばらく俯いてゐて、顔を上げ）

では、せめて佛御前に一目會うて、言ひたい事がございます。

季貞　お恨みは御もつともだが、今お會ひなされては、お爲になりませぬ。ま、ま、茲は一旦素直にお立ちなさい。

妓王　いえ〳〵。恨みは申しませぬ。たゞ一言いつて置きたい事があります、お願ひでございます。

季貞　いけませぬ〳〵。お氣の毒でも、今日は是非このまゝにお下りなさい。兎も角お次へなりとも下つて、それからの御思案になさいませ。さ、さ。

（手を執つて引き立て退場する。此の頃から舞臺漸く暗く、風の音が聞えて來る）

幕

第二場

舞臺すべて前場のまゝ、凡そ一時間も立つて、薄暗がりの寢殿にはまだ燈が點つて居ない。月が出て、櫻の木の間から、明放したまゝの座敷を照してゐる。風一しきり烈しく吹いて、花が盛に亂れ散り、愴涼の景で幕明く。やがて風の音が止むとしばらく森となり、時々思ひ出したやうに花がこぼれるばかり。忽ち奥で、

これ〳〵、待て〳〵。

佛　（やゝしどけない樣子で奥から足早に出て來る。そして振りかへつて、奥へ向き、手を輕く叩いて）

はゝは〳〵、お歳、お歳、早く掴まへて御覽遊ばせ。

（清盛わざと足を緩めて出て來る。續いて侍女一人、燈を持つて出で、前面に据ゑて、かしこまる。）

清盛　何だ、けたたましい騷をして。

佛　ほゝほゝ、でも餘り上樣が御無理をおつしやいますもの。

（二人并んで前の方へ出ながら）

清盛　嘘を言へ。何か、ひどく怖えたではないか。

佛　ほゝ、お氣がつきましたか。では敎へて差しあげませう。上樣のお頭の影が、それそれ、あの障子にも映つて居ります。大きいでございませう？

清盛　（ふり向いて見て）

はゝ、大入道だ。あゝいふのが出て來たらそちは何うする。

（佛、清盛に寄り添ふ）

佛　それ見い。やつぱり弱蟲だ。

實を申せば、上様、先程は全く恐しうございました。あの細殿を御覽遊ばせ。あの暗い中を、妓王御前が恐しい眼でこちらを睨んで、魔物のやうに飛んで行きました、

清盛　たはけを言ふな。妓王は疾くに追ひ返したでないか。それだから女子といふものは相手にならぬ。そちだけは男のやうにすつきりした事を言ふと思うたが、やつぱり駄目だな。さあ〳〵、また奥へ行かう。

佛　（躊躇して）いえ〳〵、こゝで暫く氣を靜めさせて下さいませ。さ、あなた様もこゝへお出で遊ばせ。

（清盛を引き寄せ、緣端へ並んで立つ。侍女褥を取りに行かうとする、途端に風が吹き入つて燈を消す。）

侍女　御免遊ばしませ。すぐに燈を持つて參ります。

佛　燈には及びませぬ。此の方が好い景色でございませう？、上様。

清盛　暗いな、そちは淋しうないかい。

（此のあひだ侍女褥を二人にすゝめる。二人は尙立ちながら）

佛　淋しいから好いのではございませぬか。おゝ冷い風。

（胸を押へ身を縮めて、じつと庭を見ながら、考へ込む）

でも、若しや、あれが妓王御前であつたら……。

清盛　引つとらへて、そちが思ひのまゝにしてやるまでだ。

佛　（しばらく無言、やがて氣を更へ）

ちよつと、あの月を御覽遊ばせ。風に吹き曝されて、白けて居ります事。それにまあ、花吹雪の散ります事。淋しいやうな、賑なやうな、不思議な景色ではございませぬか。わたし今夜は、生れて始めての、不思議な心持がいたします。

清盛　よい景色だ。あわたゞしい花の散りかたをする。

佛　上樣が若し花なら、此のやうにあわたゞしい中で散りますのと、おつとりした暮合ひの空に一ひらづゝ散つて行きますのと、何ちらがお好きでございます。

清盛　なる程そちは、妙な事を考へる奴だな。それは靜に散つて行かれるものなら、其の方がよささうに思ふ。併しわしにはそれは出來さうでない。わしの體には何時も嵐が吹いて居る。これ、この胸に手をあてゝ見い、この通り胸には大浪が打つてをる。それから此の手、それ、しつかりと握つて見い、熱いであらう？燒けつくやうであらう？それからこの頭、頭の中はいつも炎の風が立つて

ゐる。散るならあわたゞしく散るのがわしの本性だ。

（しばらく考へて）

あゝ、つまらぬ事を言はせ居る。わしは散り際の相談なぞは嫌ひだ。どれ、わしが手を引いてやるから、あの花の中をあるいて見ぬか、さあ來い。

（侍女、履物をすゝめる。其の方へ向いて）

そちは次へ下つて居れ。

（清盛、佛、つれ立つて庭に降り、花の散りかゝる中を逍遥する。其の間、妓王、やや髪を亂し、硯箱をかゝへて忍びやかに這入つて來る。襖の前に立つて、じつと二人の後姿を見て、又思ひ直し、硯箱を下に置いて、筆に墨を含め、襖に大字で『萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草、何れか秋にあはで果つべき』といふ

歌を書く。上の句を立つてゐて書き、下の句を、膝をついて書き了り、筆を硯箱に戻して、立ち上り、また庭の方を見る。途端に佛と顔を見合はせる）

佛

それ〳〵、あそこに妓王御前が……。

（清盛に縋りつく）

清盛

えゝ、また騒ぐか。

（こちらを見て）

おゝ、あれは妓王だ、おのれ、邪魔をしやうと思うて來をつたか。

憎つくい奴め。

（駈け上り捉へやうとする。妓王すり抜けて、音も立てず奥手へ消える。清盛茫然

として跡を見送る。佛も庭に立つたまゝ其の方を見てゐる。やがて清盛は心づいて佛の方を振り返り見、縁端へ出て）

清盛　これ佛、こちらへ上らぬか。妓王はもう逃げて了うたぞ。さあさ〳〵上つて來い。

佛　でも不思議ではございませぬか。衣の音も立てず、飛ぶやうに逃げて行きました。

清盛（淋しげに）　はゝ、妓王は身の輕い奴だからな。今に呼び寄せて糺明してやる。

佛　（上りながら襖を透し見て）

おゝ、上様、あれは何でございます。お障子に大きな文字が見えます。

清盛　え、障子に文字が？

（不審さうに一足すざつて透し見る）

うむ、成程文字が書いてある。今まで何も無かつた筈だが、不思議だな。

（次の間の口へ行つて）

これ、誰れか居らぬか、早く燈を持て來い、燈を。

侍女（次の間から）　はい、唯今。

（燭臺を持つて出て、すぐ引き下がる）

清盛　（燭臺を襖の前に引き寄せ斜に面して立つたまゝ）

『萠え出づるも、枯るゝも同じ野邊の草。』

佛　（横向きに膝を突いて坐つて）

『何れか秋にあはで果つべき。』

（讀み了つて、佛は次第に首を垂れ默然となる。しばらく間を置いて）

清盛　是れは、たしかに妓王が手だ。重ね〳〵不埒な奴め。平家の繁昌を呪ひ居つたな。

佛　（顏を上げ涙をはら〳〵と流して）

いゝえ、此の歌の心は、御當家よりも妓王御前の身の上でございます。そしてわたしの身の上でもございませう。

清盛　それなら同じ事ではないか。此の淨海が寵愛する、そちの身に不祥の事を言ふとは以ての外だ。今までこれ程大事にしてやつたのに、恩を、怨で返しをる。憎い奴め。呼び寄せて成敗してやる。

佛　まあ、お待ち遊ばせ。上樣は、此の歌の主を少しも哀れとは思召しませぬか。

清盛　哀れだ？いゝや、哀れだなどとは思はぬ。そちは何ぜさう弱い事を言ふ。他の事なぞを氣にかけて居つたら、この世は際限の無い

ものだ。他の世話をやくのは、自分の爲になるからでないか。さうでなければ自分に迷惑の無いときばかりだ。今妓王めが居つたら、そちも困る、わしも困る、わしの言つけに逆らう奴は、憎いとこそ思へ、哀れだとは思はぬ。憎い奴を仕置するに何の不思議があらう。是れもみんなそちがかはいゝからだ。そちはいやか？

（ちよつと間を置いて）

よし／＼、そちがそれ程氣にかけるなら、妓王の事は其のまゝにして許してやる。さあ、奥へ行かう。

（佛の手を取り、立たせやうとする。）

佛　（取られた手を輕く避けて）

妓王のお咎めは何うあらうとも、歌の心は少しも動きは致しませぬ。わたしはそれが哀れでございます。まして此の歌が、わたしの身や御當家の行末と見ましたら、世の定業が恐ろしうはございませぬか？　上様

清盛　えゝ、わしは、そちから説法を聞かうとは思はぬぞ。世の定業が何だ。わしは定業よりも上の人だ。日本に一人の清盛でないか。さあ、もう、さういふ話は休めにせい。わしを頼りと思はぬか。

（資成登場）

資成　申し上げます。前右大將さまが唯今これへお見えでございます。

清盛

なに、宗盛が來たと。

（座に着く、佛從ふ、資成席を整へて退くと、引ちがへて宗盛衣冠にて登場）

宗盛　おゝ、夜中に何用が起こつたか。さあ、こゝへ、〳〵。

（會釋をして座に着き、佛を尻目に見て）

父上、お話が密談にわたりますが、お差支ございませぬか。

清盛　うむ、遠慮に及ばぬ。それに居るのはな、何さ、あのそれ、佛と言うてな、近う召し使うて居るものだ。大事ない、大事ない。

佛　わたくしは暫くお次へ下つて居りませうか。

宗盛　いや、父上がお許しの上は、差支ありませぬ。そのまゝにしておいでなさい。それにしても、妓王御前は何うか致しましたか、父上。

清盛　うゝ、あれはな、無禮を働いたから、先程暇をやつた、是れを見い、斯ういふ事を書いて置いて、出て行つたわい。

（二人ふりかへり襖の文字を見る。佛は俯いて居る。）

宗盛　是れは何とした歌でございます。

清盛　そこに居る女子を恨んだのだとも言ふが、わしは當家を恨んだ心

と見た。

宗盛　其の事でございます。段々と世の成行を見ますにつけ、當家の一門に集つた、世上の恨は、思の外に深うございますぞ、父上、

清盛　は、、は、。世上の恨がそちは恐ろしいか。弱い男だな。亡くなつた小松内府が遺言とやらで、さやうな弱い事を言ふのであらう。内府を見い。餘り氣が小さかつた爲に、早死をした。此の淨海は死なぬぞ。人の恨なぞといふものは何時の代にもある。負けたものは何時でも勝つたものを恨むのが常だ。先方で恨むなら、此の方でもそれだけの事をしてやる。向ふが勝つか、こつちが勝つか、

二つ一つの外は、世を渡る道は無い筈だ。それともそちは負けたいか。え、？。馬鹿な事よ。なう、佛、そちまで鬱いで居るのは、何うしたものだ。酒でも持て來させて、賑にせい。宗盛をもてなしてやれ。

佛　上樣、わたしは此のまゝお暇を頂きたうございます。

清盛　何だと、暇をくれい？。なぜそのやうな事を言ふ？

佛　わたしのやうな罪障の深い身で、此の上のお側仕は覺つかなうございます。

清盛　つまらぬ事を言ふな。そちに何の罪障がある？。わしが斯うして居る限り、わしに背くものは罪人でもあらう、わしに從ふものに罪はない。罪障のあるないは、わしの心一つで定まるといふことを知らぬか。今そちに行かれたら、わしはどうなると思ふ？

佛　いえ〳〵罪障はわたし一人の心にあるのでございます。上様と何のかゝり合もあるのではございませぬ。先程舞の一さしで、思のまゝに妓王御前の御寵愛を奪ひ取りました時は、自分ながら勝ち誇つた氣も致しましたが、もう駄目でございます。斯うして居れば居るほど、御殿の中が萱や薄の野原で行暮れたやうに淋しうご

ざいます。あの暗い細殿には、斷えず異形の人影が往來をして居るやうで、風の吹きますたび、身内がぞつとして堪へられませぬ。上様、わたしも妓王と同じやうに、弱い女でございます。とても上様のお跡について、世間の女子の恨み妬みに勝ち了せて行かれる身ではございませぬ。この上は一刻も早く御殿を出て、人の恨が遁れたうございます。

清盛　そち達は、むやみと後を見廻すから、それで無氣味になるのだ。世の中は、闇夜の獨り道と思うて後を向くな。後を向くと己が足音まで物の怪のやうに聞えて、ちりけ元がぞつとするものだ。後には、いつでも暗い影がついて來る。

宗盛　其の暗い影を、父上も御氣づきでございますか。

清盛　知つて居る。世の中に勝つたもの、強いものには皆その影がついて居る。が、わしはそち等のやうに其の影に怖ぢ恐れて逃げ廻ることは嫌ひだ。

宗盛　實はわたくし、今日、上皇さまから、鳥羽殿の法皇さまへ お使に立ちましたが……。

清盛（屹となつて）　なに、法皇さまへ お使ひに？

宗盛　はい。お使ひに參りました。そしてあの鳥羽殿の佗しいお住居をつく〴〵見て參りました。それにつけ、わたくしは、何うも當家の繁昌の後に、暗い不思議な物の影が被さりかゝつて居るやうで不安でなりませぬ。

清盛　おろかな事をいふな。たとひ法皇さまのお力でも、今この平家をどうなさることが出來やう？。併しそのお使ひといふのは何事だ？

宗盛　たゞの御消息で、久々打ちたえておなつかしいから、近々にお出でなされて、御對面なされたいとの事でございます。

清盛　ふむ、法皇さまが上皇さまに御對面なされたい？そちはそれをたゞの御消息とばかり聞いて來たか。

宗盛　父上、そのお疑ひが即ち暗い影ではございませぬか。わたくしとても、それほどの事に心づかぬおろかものでもございませぬ。第一、ことさらに此の宗盛をお使にお立てなされた、法皇さまのお心からして、淺い御計略とは存じませぬ。併しいち早くそれにお氣のつく父上は……

清盛（いらくとして）　あゝ、もう、よいわい。言ふな〳〵。さうした沈んだ話を聞くと、

此の淨海までが勇氣を挫く。今淨海が弱い心を起したら、平家の一門は瓦解だがや。たとへ山を移し海を干しても、入道が一存は立てずには居られぬ。これ佛、酒を持て來させい、酒を。

佛　はい。

（次の間の方へ立つて、手を打ち侍女を呼び、小聲に酒肴を命じて座に戻る。）

宗盛　それから鳥羽の御所では、この頃夜な〳〵怪しい物の笑ひ狂ふ聲が聞こえますとかで、世上のものが寄ると障ると耳口を寄せて取沙汰いたします。何か大事の起る前兆に相違ないといひはやして居ります。總じて此の頃の世のさまが、上部の靜なのに引きかへ

て、何か動亂の兆を含んで居るやうで、わたくしには心がゝりでなりませぬ。例へば三位入道などが近頃の擧動にも、不審な噂がございます。

清盛　不審な噂がある？

宗盛　はい。油斷はなりませぬ。

清盛　（益々いらゝとして、座に堪へぬ如く體を搖かし、膝を立てゝ）は、、源三位などが何を爲得やう。

宗盛　そればかりではございませぬ。此のたびの嚴島行幸で、山法師ど

もの動搖が今以て收まりませぬ。

清盛　あれは、もう、わしの聲がゝりで鎭まつた筈だ。

宗盛　いや、まだ鎭まる所ではございませぬ。益々廣つて行く樣子でございます。

清盛　いや、さういふ筈はない。わしを差しおいて法師等が騷ぐ譯はない。

宗盛　たしかに此のたびの騷ぎは、たゝ事とは思はれませぬ。

清盛　たしかか？、

宗盛　はい。

清盛　憎つくい法師めら此の淨海を何と心得て居る？。今に見てをれ、山門も佛法も一揉に揉みつぶしてやる。

宗盛　併し佛法の力は目に見えませぬ。山法師を敵にして平家の天下いつまで續くと思召しますか。せめて佛法の前には弱くおなりなされて、末の安泰をお祈りなさるやう、お願ひに出ました。

清盛　弱くなるとは何うすればよいのだ？

宗盛　先づ法師等をおなだめなされて……

清盛　うるさい奴等だな。このわしが山法師ごもの前に弱くなるのか？このわしに弱くなれといふのか？

（座に堪へぬ様子で立ち上がり、廂縁の邊を歩き廻る。）

宗盛　法皇さまへもお詫びの心で……

清盛

あゝ、うるさい事だな。わしにはとてもそれは出來ぬ……よし〳〵、それではわしは他の事をしてやる。なう宗盛、一そ一思ひに都を遷してやらうか？福原へ都を遷してやらうか？畢竟此の京といふ處がうるさいのだ。

（此の時侍女等酒肴を運ぶ。清盛座に復する。侍女酒を注いで廻る。清盛頻りに杯を重ねる。）

佛　右大將さま。あなたはあの福原のお邸を何う御覽遊ばします？

清盛　お、、そちは福原を知つて居るか。

宗盛　福原が何うかしたと言はれるのか。

佛　はい。わたしは、上樣から暇のお許しが出ませぬやうなら、せめて、一生を福原の御殿で過ごしたうございます。あの南の海の青い〳〵中に、白帆の浮いて通ひます景色や、胸の廣くなるやうな磯風の香を嗅いで、いつも春のやうな暖い日を浴びて居たら、何んなに安樂でございませう。

清盛（顏色急に活氣を帶びて來る。）　お、、佛も福原が好きといふか。こゝに居ればこそ、やれ山法師だ、やれ謀叛だと、噂が絶えぬ。あの福原は、後が山で、前に海を控へて、山法師等も容易に降りては來られぬ。うるさい嗷訴沙

汰や爭亂の沙汰も、自然と遠のくであらう。さうだ、一思ひに京を福原へ移して見やう。福原へ行かう、福原へ行かう。佛、そちも福原の都へ來いよ。

佛　まあ、上樣、福原が都になつたら、京も同じ事になりはいたしませぬか？

宗盛　父上、それは御酒興でございますか。桓武このかた四百年の都をさう輕々と遷されるものではございますまい。强ひてさやうな事をなされて、此の上に又世上の恨をお重ねなされば、福原は安泰の都とはならないで、却つて平家の運の果場となります。

清盛（立ち上つて）　うるさい〳〵。もうそち等が說法は聞かぬぞ。わしの心はきまつた。四百年の都が何だ、大極殿も紫震殿も、帝も王も、此の淨海が指一本の差圖で移して見せる。

（佛の側へ行つて）

佛も連れて行くぞ。そちだけは、何時までもわしの側を離れるな。わしは淋しがる男だからな。そして明日は福原へ、明日は福原へ。さあ、わしと一緒に一さし舞うて、平家の繁昌を祝へ。福原の天下は萬々年だ。

（佛の手を取つて引き立てながら、侍女を顧みて、）

早く行つて、鼓の用意をさせい。

侍女　かしこまりました。

（皆々次へ行く。）

清盛（佛の手を引きながら）

さあ、そちも奥で仕度をせい。何を躊躇して居る。今日の今様は何とか言うたな。『君を初めて見る時は、千代も經ぬべし姫小松、君を初めて見る時は、千代も經ぬべし姫小松』

（半ば歌ひながら佛の肩にすがつて奥へ這入る。宗盛默然として見送る。外は風全く止んで、月がますゝ冴えてゐる。）

幕

運命の丘

運命の丘

人物

ナポレオン（四十四歳）
ダリユー（五十歳）
ミユラー（四十二歳）
モルチエール（四十五歳）
アンドレー（三十歳）
韃靼人二人
將校下士從卒其他

場所

モスコウ市外

時代

千八百十二年九月十四日の午後

第一場

モスコウ市の西南、雀が丘の一部、丘の頂を舞臺の前面に現はして、背後は一面にモスコウの市街を見下ろした景色、秋日和の午後二時過の日光が強くモスクワ河に反射してゐる。市内すべて本文にある通りの景。

軍服のナポレオン、馬を麓に乘り捨てた氣持で、數歩先に立ち、つか〳〵と小急ぎに下手から丘の頂に現はれる。續いてダリユー、モルチエール、アンドレー及三四の將校從卒等登場。

（ナポレオン、モスコウの市街を見るや否、）

ナポレオン。モスコウ！モスコウ！

（叫んで尙熱心に向ふを見てゐる。）

ダリユー。モスコウだ！モスコウだ！

（他の人々も之れに和して、競うて市街の方を見る。）

ダリユー。そら見給へ、あれがモスクワ河だ。其の向ふがクレムリンさ。丸の内だ。綺麗ぢやないか。

モルチエール。なる程、これや綺麗だ。まるで古い繪本が拔け出したやうな町だな。

ダリユー。あの建物を見給へ。木造だらう。塗つた屋根や壁の色も違つてるね。東洋的ぢやないか。其の前を、まるで灰色の熊が馬に乘つたやうなコザークめが、大槍を横たへて通る所は似合つてるな。配合がいゝぢやないか。

アンドレー。北國に似合はん明るい町ですね。空氣も實に澄んでる、たしかに神聖な町といふ感じがしますね。

モルチエール。眩しいやうだ。金の十字架が、まるで星を散らしたやうに光つてるぢやないか。あれが皆んな寺だらうか。寺の多い處だな。外郭も内郭も、見給へ、町の半分は寺だが。尖塔がまるで雜木林のやうに幷んでる。其の一本々々に金の星がかかつてゐるのだ。

アンドレー。寺院ばかしが三百近いでせう。それから處々新月の徽章も光つてゐます、マホメタンの寺でせう。斯うなると壯觀ですね。十字の星と新月が此古い街の空に撒いたやうに浮んでる。これだけでも胸が躍りますね。あれが此の町の命なのだ。命のサンボルが、あゝして光つてるのだ。平和ですね。つひ、そこいらまで煙硝の煙で重くなつてゐた空氣が、茲へ來ると水晶を斷ち切つたや

うに澄んでゐる。其の中に強い色を塗り立てた屋根や壁が品を作つてる所は、成ほど女性的ですね。ロシア人は此の町をおツ母さんと言ふさうだが、私等には美しい尼さんといふ感じですね。

モルチエール。　處々隨分大きな庭がある。人家の間に森を切つて撒き散らしたやうな處だ。何うしても繪本だ。是れが本當にモスコウなのかなあ。夢のやうだ。

（飽かず市街を見てゐたナポレオンは此の時初めてこちらを向き、近くに立つて居るモルチエルの肩を輕く叩いて）

ナポレオン。　おい！

モルチエール。　はツ！

（皆一齊に其の方を向く。）

ナポレオン。　モスコウへ來たんだよ。氣をたしかに持たなくちやいかんよ。

モルチエール。　陛下、夢のやうでございますなあ。

ナポレオン。　夢ぢやあない。本當のモスコウへ來たのだ。到頭來たのだよ。

ダリユー。　夢が事實になつたのですね。

ナポレオン。　お前にも似合はん事を言ふね。初めから事實さ。夢が何で事實になるものか。俺がパリーでセギユール伯に言つて聞かせたのはそこさ。俺には初からモスコウは目に見えて居た。必ず來られるものといふ確信があつたのだ。確信は運命だ。運命は事實だ。

ダリユー。陛下の其の筆法によりますと、モスコウは陛下の運命でございますね。

ナポレオン。運命だ、全く運命だ。俺には是非とも一度此のザールの城へ來なくちやならん運命があつたと思ふ。モスコウは私の戀人だ。古い〳〵前世からの戀人であつたのだ。先き一目見た時に、私はすぐさう思つた。今までこの懷しい戀人を人手に委せて置いたのが妬ましいやうだ。

（振りかへつて復た市街の方を見る）

ダリユー。前世からの戀人ですね、約束されたる土地ですね、人生にはたしかにさうしたものがあります。

アンドレー。併し閣下、前世からの戀人といふやうな者は、こんな北

の暗い國へ來てこそ道理と思ひますが、フランスには、少なくとも女にさういふものはございますまいね。明るい國の人間は淺い戀をします。其の代り急です。底まで透き徹つた小川の瀨のやうに、急な思ひをするのが、フランス人の習ひでございませう。

モルチエール。此處で女の話なんか怪しからんな。

ダリユー。フランスの男は戰をしながら戀を論ずるさ。

モルチエール。戀を論ずるもいゝが、早く陛下をクレムリンへ御供したいものだな。

アンドレー。ミロラドヴキッチ少將が歸つてから、彼れ是れ二時間近くなりませう。もう、町の使節が來てよい時刻ですね。あゝ御覽なさい、今やつと敵軍の後衞が町を出はづれました。あの森の蔭

に續いてるのが其れです。あれでクツーゾフ元帥の率ゐて居られる九萬がすつかり退却した譯です。

ダリユー。やあ、ミユラー將軍が市街の入口で盛に歡迎せられてゐるぞ。貧民ごもが珍しさうに集つて來るぢやないか。まるで觀せ物扱だ。

ナポレオン。クレムリン！響のいゝ言葉だ。あの邊が宮城だらうな。おい！地圖を見せないか。

（アンドレー、市街の地圖を披いて捧げる。ナポレオン手に取つて見て）

ふむ。

（顏を上げ、また市街を見入つて）

あれだ。クレムリン、クレムリン。俺はあの宮中の繪を見た事がある。あの大きなサロンには、さうさう、イタリヤから磨かせて來た大きな大理石の柱があつた。あの前にアレキサンドルと后とが並んで腰をかけて居た。あのアレキサンドルの神經質らしい顏は、決して憎い顏ぢやない。私の兄弟にして、つき合つてやりたいと思つた。

（直立して凝視してゐた將校等互に顏を見合はせる。ナポレオン顧みて）

ねえ、さうだらう？全くルツスは憎くない國民だと思はないか。俺は好きだよ、俺は。

モルチエール。全く憎さげの無い國民でございますな。のろつとして居て、素直で、勇敢で。

ダリユー。いや、我々の脈管に流れてゐる血が同じセルトの源だか

ら……

アンドレー。それもさうでせうが、一方から言ふと寧ろ違つてるから相惹くのかも知れません。異性相惹く道理ですね。永い間冷たい外部の壓迫で、反抗的に沸いた彼等の血は、永久に熱いのです。所が、自然が温めて呉れた我々の血は冷熱が早い。僕はむしろ、僕が西南の人であるといふ理由で、此の東北の神秘な國民を慕ひたいと思ひます。

モルチエール。はゝ、君の言ふことは、あんまり感に入り過ぎて可かんよ。第一我々は征服者だぜ。強きものが弱きものを愛する關係だぜ、忘れちやあ可かん。

アンドレー。ですが、愛は強い弱いの關係ではありません。

モルチエール。はゝ、生意氣を言ふなよ。

ダリユー。まあいゝさ。若いからなあ。戰をしながら戀を論ずる筆法だらう。ねえ、君。

（ナポレオンは地圖を卷いて手に持つたまゝ、そこらを大股に往つたり來たりして居たが、寄つて來て）

ナポレオン。まだ來ないか。遲いぢやないか。

モルチエール。もう來さうなものでございますな。おい君、一つ偵察にやつて呉れ。

アンドレー。は。

（下手へ行つて何か命ずると、一人の士官急ぎ足に降り去る）

ダリユー。陛下はお疲れであらうから、そこらへ假りに何したら何う

だらう。

ナポレオン。要らん／＼。俺の顏に疲れが見えるか。

ダリユー。いや、お顏色は却つて益々活氣を帶びて參るやうでございますが、何にしても一週間以來のお疲れでございますから。

ナポレオン。俺には疲勞といふ事は無い。此の眼の輝くのは、それ、運命が眼の前に來たからさ。此の晴れた空に、此の壯麗な景色を見て、興奮せずに居られるか。ダリユーなぞも顏色が違つて來たぜ。つひ先つきまで君等の顏にはボロデイノの影が粘りついてゐた。死の影がついてゐた。それが今ぢやモスコウの影が反射してゐる。生の影だ。みんなの眼が躍つて居る。今にクレムリンの城へ這入つたら、君等は一番がけに何をするだらうな。モルチエー

ルは何が欲しいか。

モルチエール。久しぶりで善い葡萄酒でも御馳走になりませうかな。

アンドレー。私は先づ靜な部屋に引つ込んで、この興奮の心の褪せない內に日記をつけたいものでございます。

ダリユー。私もそれに贊成。

ナポレオン。さう／＼、ダリユーは歷史家で詩人だつたな。

ダリユー。『だつたな』は恐れ入りました。

ナポレオン。忘れて居たのだよ。

ダリユー。忘れられて少しも恨みはございませんな。私なぞは新世紀の上にさしかけてゐる十八世紀の影のやうなものですから。

ナポレオン。はゝ、悟つたね。

ダリユー。却つて此のアンドレー君などが十九世紀の若い息を呼吸してゐて、自然と詩人になつてゐます。

ナポレオン。ふん。若い者の時代か。俺なぞはダリユー、どちらの組か、若い方か古い方か。

ダリユー。さやう……陛下は勿論私なぞよりも若くて入らせられるし、國家の上では新しい時代を代表せらるゝのでございませう。

ナポレオン。其の譯は？

ダリユー。さやう……十八世紀の纖弱な冷たい文明に對して、強い熱力の要求が陛下のお體に權化したと申したら、如何でせうか。

ナポレオン。ふむ。併し其の力は何處から來るだらう。私に言はすれば運命だ、運命！力はそこから來る。若し私が十九世紀の時代を

暗示するとしたら、私は運命の權化だと言つて貰ひたい。

アンドレー。（進み出でゝ）陛下、陛下、私は唯今の瞬間に於いて、陛下に神仙の如き高風を感じます。運命の權化！何といふ深いお言葉でございませう、手が此の通り感激に顫へて居ります。何うか握手を願ひたうございます。

ナポレオン。よし〳〵。

（微笑しながら固く握手する。其の途端に市街の方で爆發の音が一つする。皆皆愕然として其の方を向く。ナポレオンも俄に正氣づいたやうに屹となる）

モルチエール。あれだ〳〵。外郭に接した東の處に煙が上つてゐる。何事だらう？うむ。騎兵が這入つて行くやうだから、今に分かる

だらう。是りや長く斯うして居るのは危險かも知れんよ。使節は何うしたのだらう？何うして遲いのだらう？

（一同無言で、待遠しい樣子に市街の方を見る。ナポレオンこちらを向いて）

ナポレオン。今に來る。屹度來るよ。先つきの報告はまだか。もう一度偵察にやつて見い。

アンドレー。は。

（再び下手へ行つて合を傳へる）

ダリュー。町が段々靜になつて來るやうに感ずるが、嘘かねえ。動く光線や活きた音波の刺戟といふものが、まるで無くなつたやうな感じがする。見給へ、馬鹿に森として來たぢやないか。河の瀨の音が聞こえる。

モルチエール。はゝ、生の町がまた死の町になつたかな。モスコウがボロディノになるのかな。

ナポレオン。（モルチエールの方へ鋭い一瞥を投げて）馬鹿ッ！

モルチエール。（姿勢を正してナポレオンの方へ向き）陛下、お氣に觸りましたら御免下さいませ。併し私は飽くまでも戰地といふことを忘れたくないと思ひます。モスコウに何時敵軍が現れても驚かない覺悟はして居たいと思ひます。私は今以てまだ確實にモスコウを占領したとは思つて居りません。

（ナポレオン無言のまゝ往つたり來たりしてゐる。皆々無言。一同の胸に一種の氣まづい心持が流れ込む。しばらくして）

ナポレオン。分かつたよ、分かつたよ。併し私はもう確實にモスコウを占領したつもりで居るね。先つきからクレムリンの宮城で、大夜會を開く手筈まで考へて居る。二百九十五寺といふ夥しい寺の坊主どもを集めて諭してやらうと、其の演說の腹案まで拵へた。寺の建物には、殘らず大きな字でMaison de ma mère と彫りつけさせてやらうと考へた。此のモスコウには、お前等のうち誰を總督にしやうかとそんな事まで考へてゐる。モスコウ占領！もう動かん事實だ。夢ぢやない、夢ぢやない。

（言つてじつと市街の方を見下して立つてゐる。皆々同じ方を見て無言。此のとき一同の胸に一種の不安が崩す心持。やがてナポレオンはそこらを歩きはじめる。）

ダリユー。もう何時だらう？日があんな方へ行つたね。何うだらう、

兵をやつてロストプチン總督を連れて來させては。

モルチエール。何うもそれがよくは無いかな。暗くなると面倒だぞ。先つきの爆聲が何か意味があるのぢやなからうか。

（ナポレオンはまた市街の方を見て沈默してゐる。日影が薄くなつて、處々の庭木の森が黑んで來る。間を置いて）

アンドレー。あゝ、來た〳〵！報告を持つて來た。

（騎兵一人、飛び下りて、アンドレーの前に直立し、封書箱を渡す。手早く開いて）

アンドレー。あゝ、是れは先つきの爆聲に關聯した事です。（急いで讀む內に顏の色がかはる）是れは怪しからん。大事件でございます。

（皆々驚いて聞耳を立てる。ナポレオンも無言で立つて聞いてゐる。）

ロストプチン總督が囚徒を悉く解放した樣子で、其一人が先程の

爆發に關して我が軍に捕縛せられました。場處はドロゴミロフの門に近い市街の空家で、爆發の原因等は不明、出火にはならなかつたが、附近で擧動不審な一人の韃靼人を捕縛したのださうでございます。

モルチエール。其の韃靼人を調べて見たのか。

アンドレー。取り調べたが更に口を開かないとあります。

モルチエール。そりや容易ならん事だ。すぐ市街を警戒しなくちや行くまい。

アンドレー。勿論やつてるやうです。

モルチエール。それから其の捕縛した韃靼人は連れて來たのか。居るならすぐ此處へ連れて來いつて、通譯を附けてな。

ナポレオン。なあに心配するには及ばない。大勢はもう極まつてゐる。この運命は動くものぢやない。そいつは追つ放してやれ。

モルチエール。でございますが、此の際注意しませんと……

ナポレオン。いゝさ、いゝさ。それは何か偶然爆發したんだらうよ。偶然の事だ、恐るゝに足らん。

（立つてゐる騎兵に向いて）

さう言つて行け。

（騎兵敬禮をして引きかへす）

それよりか、一方の樣子は何うだ。一向に報告が來んぢやないか。

誰れか此の內で行つて見い。

アンドレー。私が參りませう。

（敬禮をして行かうとする時第二の傳令來たる）

アンドレー。　お、、報告か。

（下手へ急ぎ足に行くと、馬から飛び下りた士官、あわてた樣子で、聲を潛めて話す。アンドレーの顏色また〳〵變はる。他の二人も寄つて來て報告を聞き、顏を見合はす。ちよつと密語をして、ナポレオンの方を振り向くと、立つて鋭く皆の方を見てゐたナポレオンの眼と見合つて、あわて、他を向く。同時にアンドレーがつかつかと群を離れて進み寄り、顫へた聲で）

アンドレー。　陛下！モスコウは空虛（くうきよ）でございます！

ナポレオン。　えゝ？モスコウが空虛？

アンドレー。　はい、空虛でございます。

（ナポレオンは聞くと同時にアンドレーの上に投げた鋭い眼光を、市街の方へ轉じて、無言のまゝじつと見てゐる。顏の色變はる。アンドレー其の他皆々佇立したまゝ、一齊にナポレオンの横顏を見つめて、身動きせず、しばらくの間、森として聲無き氣持。）

ナポレオン。　馬車を持つて來い。

（士官の一人走り去ると、跡からナポレオン大股につか〳〵と丘を下手に降りる。皆々沈默のまゝ續いて降り去る。丘の上には夕日が淋しく薄れて殘る。）

幕

第二場

モスコウ市の一方の入口たるドロゴミロフの見附が夕日を負うて遠見に立つてゐる。路傍の土手上の景。

髪も髯も蓬々と伸び、垢まびれの顔の蒼白く窶れた韃靼人二人、土手に腰をかけ、下の路からかけて向ふの方を眺めてゐる體で幕上がる。

甲。一體どうしたと言ふんだ。馬鹿に騒ぎ出したぢやないか。

乙。町へ這入つて來ると言ふんだらうよ。

甲。それにしてもお前をよく放免しやがつたなあ。よつぽど言ひ拔けがうまかつたと見えるな。

乙。俺は言ひ拔けなんかしやしねえ。たゞ言葉は一切韃靼語のほかは分りませんといふ風をして默つて居ただけさ。なあに、俺の體はどうせもう、持てあましてる體だあな。殺さうが活さうが、悲しくもなけれや、嬉しくも無え。總督さんに賴まれたから、火だけはつけてやるが、つけねえかも知れねえ。どつちだつていゝ事だ。

甲。だつてお前、同んなじロシア人だな。賴まれた以上は……

（向ふを見て）

あゝ、通る〳〵。あれがナポレオンだらう。來ねえ〳〵。行つて見やうよ。

（甲が乙を引つ張るやうにして後へ降りる）

舞臺廻る。

第三場

ドロゴミロフの見附前、夕暮の光景。門の兩側に數人の衞兵が立つてゐる。路を離れて前場の韃靼人二人及び貧民體のもの三四人まばらに立つて見てゐる。

ナポレオンは馬車を降り、徒歩で、第一場の人々を從へ、ミユラーに先導せられて門の前まで來る。

ミユラー。是れがドロゴミロフの見附でございます。御命令で兵は總べて一足先に市街へ入れて置きました。

（ナポレオンは見附の入口でぱたりと歩を止め、石門を見上げて立つてゐる。皆々一様に立止まる。しばらく無言。）

ナポレオン。もう是れでいゝ。此の門さへ見れば、私は滿足だ、今夜は私は引きかへして此の村へ泊らう。ミユーは市街の方を氣をつけい。

（言つてすた〳〵と跡へ歸らうとする。皆々驚く。ミユラー急いで其の前に立ちふさがる）

ミユラー。陛下、それはまた何うした譯でございます。こゝまでお出でになつて、引つかへすと仰しやるのは意を得ません。縱へ市民は遁走しても、市街と宮殿とは殘つて居ります。陛下、是れが此の大戰爭の目的地たるモスコウの町でございます。是非お這入りを願ひます。申すまでもなく危險は少しもございません。ミユーが身を以てお守り申して居ります。危險をお恐れになる陛下ではない。此處からお引つかへしになるといふ法は、斷じてございません。

（ナポレオン再び門の方を向いて、見上げたまゝ、默して答へず）

モルチエール。ちよつとでも、クレムリンの宮城へ陛下がお這入りになれば、一般の士氣が振ひます。

アンドレー。陛下はモスコウの町に這入るのが運命だと仰せられたでございませんか。其の通りになつて參つたのです。躊躇なさる理由はございません。

（熱心に進み寄つて）

運命！運命！陛下、運命の門はこゝに開いて居ります。たゞ一足です。クレムリンの門も開いて居ります。我等、フランス人の手で明けて待つて居ります。あれ程待ち焦れてお出でになつたモスコウへ來たのでございませんか。陛下は運命の權化だと仰しやつた、あの豫言が今一足で充されます。よしロシア人は一人も居なからうが、フランス人のモスコウで結構でございませんか。何うかお這入り下さい。陛下我々がお手を取りませうか。馬車にお召

しなさいますか。

ナポレオン。（じつとアンドレーの顔を見て、やゝ涙ぐみ）

運命！　運命！　運命の門！

（アンドレーの肩に兩手をかけ）

空虛なモスコウ！　空虛なクレムリン！　はゝ、はゝ。

（絶望的に笑ひすてゝ、すた〳〵と門の中に這入る。皆々驚いてついて這入る。跡に衞兵も見物人も居なくなると、先程の韃靼人二人門の前に進み出で、人々の這入つた跡を見送つて）

乙。運命の門だとよ。

甲。這入つて行つちやつた。

乙。は、は。

（乙が氣の無い笑ひを一聲したまゝ、二人とも口を明き、窪んだ眼を一杯に見ひらいて、無意味に門を見て居る。日が暮れて行く。）

幕。

（モスコウはフランス人にはモスクウであらうし、クレムリンはロシア人にはクレムリださうである。又ダリユーは實際は此時四十六歳であつた。是等は舞臺上の發音の便宜や筋の便宜で詩的特權の自由を用ひた。）

海濱の一幕

海濱の一幕

娘　甲、乙
男　甲、乙
浴客の婦人甲、乙
浴客の老人
書　生　甲、乙
若　者
小　僧

娘甲。（娘乙の肩につかまるやうにして歩きながら）まんだ早いせいだか、人が遊んで居ないわよ。何だかきまりが惡いよう、こんなに早く髮なんか結つて。（頭に手をあて、見る。兩人立止る）

娘乙。構ふもんか、人は人だによ、こちとらは爲ることをして、濟ますことを濟まして來たんだもの。大晦日だとつて忙しいと極つたものぢやないよ。町がこんなに靜なのは、不景氣だからさ。

娘甲。不景氣だつて、嫌だよ此の人は、定さんの口眞似なんか止してお呉れよう。

娘乙。だつて不景氣ぢやないか。見せい、あの寶來屋の店なんか景物の看板ばつかし幅を利かせて、客は一人もありやしないぞよ。

娘甲。そりや然だけれど、でも寶來屋の店は妾好きよ。御覽よ、し

よつちう東京から珍らしいものを取り寄せてゐるに。天下堂だつて、名産堂だつて、幷べてる繪葉書からして、何時も同じものばかしで、寄つて見る氣もしないがよ。寶來屋の店だけは、前を通ると自然に足が留まるでないか。あの右の窓に幷べてあるもの、なんて好い色合なんだらう。下の黄色いぼかしになつてるのは、電燈の笠だとよ。それよりか、懸つてるリボン！　褪紅色はいゝわね。クリームの地に縞の這入つたのが見えるだらう？　高等な色合えね。空氣草履だつて、好いのがあるよ。表が水淺黄の天鵞絨で、鼻緒が繻珍の切れで。東京ぢや、もうあんなのでも廢つてるのか知ら。何んなのが今流行つてるだらう、行つて見たいわねえ。（うつとりとして海の方を見る眼が潤みを持つて美しい。又店の方を眺めて）ほ

ら、遠くから見ても、あの窓だけ眼を明いたやうに明るいだらう？　輝いてるだらう？　此の町中で一番あの店だけが活きてるやうだ。他はみんなどろんとして、眠つてるやうだによ。

娘乙。　それでゐて客が來ないんだから、尙の事不景氣ぢやないかよ。

娘甲。　そら御覽よ、お前がそんな事を言ふから、早速お客が一人來た。

娘乙。　長芋を賣りに出た小僧つ子だによ。

娘甲。　だつてお客でないか。墓口を買はうとつて見てゐるのだよ。此のごろ、中で口金の合はさる墓口が來たから、屹度あれを見てるのだよ。あれ〳〵、見な、源さんと定さんが遣つて來たよ。そら、橋のとこ、寒さうぢやないか。風があんなに上つ張をまくつ

てゐるよ。弱つてぐる〳〵舞をしてゐる。おゝ、をかしい。

娘乙。お止しよ、人が笑はな、御覽々々、橘屋へお客が着いた。夫婦客だよ。橘屋の門松は今年は小さいこと。やつぱり不景氣だからだよ。

娘甲。また始まつた、そら定さん達がやつて來る。早く隱れやうよ。こんな所に立つてゐて、見つかると又からかふから。

娘乙。構はないよう。此方でからかつてやれ。でもあの衆も、もう上衣なんか着てゐるよ。

娘甲。源さんの上衣の模樣は馬鹿に赤いでないか。夷子さまが鯛でも釣つてる所だらうか。定さんのは浦島太郎だよ。ほら來た〳〵。

（乙の後に隱れるやうにする）

娘乙。（すまして）こんちや。

男甲。よう〳〵。

男乙。もう早えおめかしか何かで、早えなあ、お前たちは。あつちの方へ行つて見べえ、一緒に行かねえかよ。（二人とも立ごまり、一寸女と話し合つて、向ふへ行く。女二人も、少し離れてついて行く、すべてゆる〳〵と歩く、奥手の隅でまた止まる、入りかはつて次の三人出で來る。）

浴客の婦人甲。御前さま、何といふ靜な町でございませう。年の暮のやうぢやございませんね。

浴客の老人。もう春の景色だ、梅でも咲きさうだなあ。でも日が沈みかけたと見えて、段々寒くなるやうだ。

浴客の婦人乙。（仰いで町の家根越しに見える山脈を眺めて）まだあの山半分、日

が射してゐますよ。日あたりは全く暖さうですことね。

浴客の老人。　此の邊は枯山の色がみな暖さうに見える。枯葉が赤味を帶んで、枯れ切らない青草のやうなものも大分交つてゐる。そこへ日が射すから尙暖さうに見える。が、何だか斯う、鈍い血の色のやうに赤い山だな。

浴客の婦人甲。　でも町は、かげると矢つ張り寒さうに見えますのね。人通りの少ないだけ、尙からつとして。

浴客の老人。　人間と言ふ奴が巣を造ると、兎角暗い蔭が出來るものだ。

（間を置いて）お前、あのピストルは仕舞つて置いたらうな。

浴客の婦人乙。　はい、たしかに（二人とも向ふへ行く。入りかはりに次の二人現はれる）

書生甲。君、さつき見たらう？　あの砂濱に、大儀さうに横になつてゐた、あれは皆病人なんだよ。あゝして日光を吸うては、ごろごろしてゐる。それが大抵は若い活動ざかりの人なんだから、かわいさうさ。海岸の空氣や日光を、藥を飲むやうな心持で、吸うたり浴びたりしてゐる。あの時にこそ、全く人間は、自分の肉體が衰へ亡びて行くことを感ずるね。

書生乙。つまり、君が、身につまされるのだ。

書生甲。さうかも知れん。そら、見給へ、向ふの角に柳の木が一本立つてゐて、其の手前の小流で、かみさんが煤けた小障子を洗つてゐるだらう？　樹の下ぢや、白粉を眞白に塗つた村娘と、上張を着て新しい手拭を首に結んだ浦の若い衆が立話しをしてゐる。そ

つくり繪ぢやないか。いゝね、何となく長閑な別天地といふ感がして、都會の大晦日とは違ふねえ。

書生乙。馬鹿に氣に入つたやうだなあ。まあ、もう一二日居て見なけれや、分らんよ。

書生甲。全くいゝ。斯ういふ所で育つて、斯ういふ所で死んで、一生を何等の精神的煩悶もなしに過ごせるものは、幸福だ。斯ういふ所の若い人の顔には、見給へ、暗い運命の影なんてものは、てんで痕跡を印してゐない。彼等の太い突つ張つた聲は濤の音の反響であるし、彼等の濃い血色は、黄金色の蜜柑山や紺青の海から反射して來る光線で染め上げたのだ。逞しい骨格は、あの大山脈の模型と言つていゝ。斯ういふ所からは、早く人生の悲哀を味ふやうな不運の兒は生じない譯だ。僕等のやうな、やくざな體のものは、實際、彼等の、大自然と連なつたやうな健康が羨ましいなあ。

（言ひながら不圖また向ふを見ると、柳の木陰に立つてゐる甲の娘が彼のうつとりとした目附で此方を見守つてゐたのと、眼を見合はす。娘はあはてゝ他を向く。書生がじつと其の方を見てゐると、此の時忽ち、寶來屋の店先にゐた十二三許りの小僧が、長芋の藁苞にしたのを提げて足早に通りすぎる。と思ふと、突然また一人、紺の上張に三尺を締めた若者が、突かけ下駄で足音を殺しながら走つて行く。驚いてみな〳〵其の方を見る途端に、若者は先の小僧に追ひつき、後から肩を摑んで、ぐつと引き戻し眺みつける。）

若者。野郎、出せ、隱すない。（懷に手を突つ込んで、革の小さい新しい蟇口を引き出す）此の野郎、さんざ品物をいぢくり散しやがつた揚句

に、之れを萬引しやがつて。ちやあんと睨んでゐたんだぞ。太え野郎め、さあ、何うしやがる。警察へ來い、警察へ來い。

小僧。（藁苞を抛り出し、頸首を取られたまゝ、うつむいて、涙ぐみ、懐を探つて）負けて呉んなよ、買ふから。よう、負けて呉んなよ。

若者。負けて呉んなも糞もあるかい。此の泥棒め。負からなきや盗んで行くつもりか。太え野郎。ぢや、是れ、二十錢に負けてやるから買つて行け。さうすりや、今日だけは許してやる。

小僧。（紙に包んだ銅貨を出しながら）さつき長芋を賣つたのが茲に二十錢あるけんど、是れみんな無くしちや叱られるから、十錢に負けてくんなよ。

若者。野郎、錢も無い癖に、品物なんかいぢくり廻しやがつて。初

手から盗む氣で來やがつたらう？　負からねえ。其の二十錢みんな置いてけ。それで無けれや警察へ來い。（頸がみを取つてこづく。大勢立つて見てゐる方へ向き、ちよつと笑つて、又小僧の頸首をゆすり）さあ、何うしやがるんだ。早くせい。大晦日たぞ。（小僧が澁々其の金を渡すのを引つたくり、蟇口を突きつけて）野郎、顔を上げえ。手前は一體何處の者だ。岡の者か。名は何だ。力造？　苗字を言へ、苗字を。隱したつて直ぐ知れるこんだ。下を向くなつて事よ。今になつて耻かしがるにや及ばねえ。さあ、皆さんに此の顔をよく見て置いて貰うんだ。（小僧の顔を仰向けさせて、見物の方を見、またちよつと笑ふ。）一度泥棒すりやあ、一生泥棒だぞ。おれがよく手前の顔を見覺えといてやる。今度斯ういふ事をすりやあ、懲役だぞ。さあ、よし。是れで

な、手前の顔はこゝいらの人の眼にや、泥棒といふ極印がついたんだ。悪い事をしたつて、すぐに取つ捕まるぞ。さあ、此の墓口を持つて行け。（突き離して若者は行つた。見物人の間につぶやきの聲が一しきり起つて、去るものもあり、立つたまゝ小僧の爲る事を見てゐるものもある。小僧は泣きもせず、眞蒼な顔をして、心もち顫へながら靜に藁苞を拾つて、周圍の人々の顔をちらと偷むやうに見、しよんぼりとして向ふへ這入る、人々四方へ散じ、二人の娘のみ殘る。）

娘甲。かわいさうぢやないかよ。

娘乙。何がかわいさうなものか。自分で悪い事をしたでないか。

娘甲。家へ歸つて何うするづら。あんなに顔を曝されて、もう此の土地にや居づらからう。

娘乙。まだ子供だもの。

娘甲。だつて、大きくなつたつて人は忘れやしない。

娘乙。其のうちにや、何處かへ突つ走しつてでも了ふづらよ。

娘甲。爲さんも、譯こそ違ふが、ちやうどあんな風にして突つ走しつたけよ。

娘甲。あら嫌だ、お前まだ爲さんの事を忘れないでゐるのかよ。（笑を隱した眼で甲の顔を見ると、甲は心持顔を赤めて）

娘甲。さうぢやないけんど、あんな風にして否應なしに旅へ出る人もあるし、源さんや定さんのやうに、出たい〳〵と言つてゐて出得ない衆もあると思つたからさ。そら、源さんがお前を呼んでるによ。

娘乙。いやだ、あんな手つきをして呼んでるよ。さあ行つて見やうよ。

（つれ立つて去る。今まで向ふの店の前に背中を見せて立つて居た二人の書生、こちらを振り向いて無言のまゝ娘の跡を見送つてゐるこ、段々暗くなりかけた柳の木のあちら邊から、旅舍の軒の電燈が二つ三つぱつと點（とも）つて來る。）

幕。

復讐

復讐（縮圖劇）

暖く裝飾した西洋室

春の日の午後

女、二十五六歳

男、二十二三歳

兩人テーブルを中にして椅子にかけてゐる。

女　どうせ葉山があんな風になつたのですもの、仕方はありませんわ。これでもね、學校時代の夢の醒めない内は、よくお友達などとそんな話をしましたつけ。こちらで捧げるだけの愛を酬いて呉れない夫なら、何度分れたつて耻ぢやないつて、隨分力んだものですよ。けれど此の五年來の經驗で、わたしすつかり悟りましたわ。男は到底女の思つてるやうなものぢやありません。

男　まあ、ちよつと待つて下さい。僕これでも男の部類ですから、どうかお手やはらかに願ひます。

女

あら、すまない事ね。だけどあなただつて、今に奥様をお迎へになつたら、乞度同じ事よ。男といふものは、つく〴〵當にならないものだと思ひます。それでゐて、そら、うまい事を言つてるぢやないの？　七人の子は生すとも女に心を許すなんて、隨分手前勝手な事を言つたものですわね。わたし眞面目くさつてあんな事を言つた奴の顔が見てやりたい。

男

けれども、それは男によりけりです。さういふ輕薄な男もあるでせう。併しさうでないのも居ます。たしかに居ます。女だつて、實際心の許さなれいのも居るし、さうでないのも居る。

女

いゝえ、わたしさうは思はないの。女は事情が違ひます。少しでも量見のある、身分のある女でしたら、男のやうなふしだらは、めつたにしません。男はそれがざらぢやありませんか。それは百人に一人や千人に一人、まちがつた事をする女もありませうさ。けれど、其時だつて、大抵は女の身として可哀さうな事情があるものです。そこですよ男と譯の違ふのは。男の浮氣は贅澤からです。女だつてそれは、そんな氣持を起すのが稀にはありませうが、藝娼妓や、下等社會か何かでなくちや、それを容易に實行するものぢやありません。一番よくあるのが、さんざ淋しい思ひをした揚句、男の薄情を恨んでそんな事をするのです。やけになるのです。かわいさうぢやありませんか。それでなく自分から仕かけた間違なら、そこには大

抵言ふに言へない義理や人情合から、じり〳〵と身に沁み入つた愛が外にあるでのすよ。夫にも換へられない切ない愛が外にあるのです。其の愛の火で、夫婦といふ形式なんか燒き切つて了ふのです。一層眞實な夫が外にあつて、否でも應でも其の方へ行かなくちやならないやうになるのですわね。そんな愛を持つのが不都合だと言へば、それまでだけれど、愛は、まあ言つて見たら清水の自然と湧くやうなものでせう?、不都合の百萬遍を繰り返したからつて、出て來るものは出て來るし、無くなるものは無くなります。

男　それほど分かつてゐて、あなたは矢張り、葉山さんがあなたに冷淡になつたのを、恨んでゐらつしやるぢやありませんか。

女　恨みはしないわ。恨んだつて爲やうがないのですもの。たゞね、葉山なんかのは、そんな立派なのぢやありませんよ。あゝして、たゞ色んな女や色んな酒に浸つてゐるのが面白くて、それが亢じて、わたしに對する愛情といふものを散ちして了つたのです。考へて見れば、馬鹿を見たのはわたしね。私がそんな下らないものを向ふへ廻して、權衡にかけられて、そしてその下らないものよりも、もつとつまらない破れ草履か何かのやうに打つちやられて了ふのですもの。馬鹿らしいと言へば馬鹿らしいし、恨みを言へば恨みもありますさ。立派な愛を注ぐ女が外にあつて、その方が何うしても思ひ切れないとでも言ふのなら、私が愛の競爭に負けたのですもの、女の

意氣地としても、私だつて立てる義理は立てやうぢやありませんか。けれども、葉山のなんか、元から愛だの人情だのといふ立派なのぢやないのですからね。相手にしたつてつまらないわ。

男

（じつと女の眼を見て）

それであなたは、此のさき何うなさるつもり？。

女

どうせ淋しい女ですもの、何うならうと構ひません。

（立ち上つて窓から外を見る）

男

僕があげた手紙の返事を、今日聞かせて下さる筈でしたね。

女

えゝ。お言葉はうれしうございますわ。心と心で思ひ合ふ人をこしらへて、胸の中にそつとかこつて置けば、それが我々の生命の泉になるとお書きなすつたでせう？　けれども、たゞそれだけなら、私もう諦めたのですから、あんまり役に立たないの。どうせ淋しく暮らさなくちやならない運命なのですから。

男

併し、さう仰しやるけれど、それはあなたの本心ぢやないでせう？。

女

（振りかへつて）

何せ？

男

あなたは本當に、たゞさう諦めて居られると思つてらつしやるのですか？　昔のおとなしい女なら、無理にもそれにして了つたでせう。けれどもあなたの今の心は、それほど單純ぢやないでせう？　あなたの側へ寄るほどの男は、みんなあなたに引きつけられて了ふ。皆さう言つて居ます。僕のやうな臆病者が、あんな手紙を書くほど大膽になり得たのも、其のためですよ。あなたの血管には、不思議な力が流れてゐます。あなたの心の底には、何か隱れたものがある筈です。

女

ほゝ、あなた、わたしの心を見通したやうな事を仰しやるのね。底に隱れてゐると言へば、何でせう？

男

僕は、それほどあなたが冷たい人だとは信じられません。必ず潛んでるものがあるに違いない。僕には直覺でそれが分かります。

女

（男のかけた椅子の傍に寄り）

私すつかりあなたに見透かされてよ。白狀しますわ。私は復讐がしたいの。

男

（意外といふ表情）

復讐？

女　何うしたら敵が討てるでせう？　わたしといふものを踏みにじつた葉山ですもの、わたしも見事にそんな男を背負投してやりたいわ。

男　併しもう葉山さんのあなたに對する愛は無いと仰しやつたぢやありませんか。背負投にするものがないでせう？

女　あるの。愛が無ければ、其の代りにするものがあるの。あの人の、男の面目を潰してやりたいと思ひますわ。

男

何うして？

女　ほゝ、分からないの？　ぢやあ、今度は私があなたに伺ひませう。あなたが私の心に潜んでると仰しやつたのは何？

男　それはまるで違つた話です。

女　いゝえ、違つちや居ないの。私ちやんと分かつて居てよ。あなたはね、私が愛を外に求めて居ると仰しやつたのでせう？

男　けれども何うしてそれが——

女　復讐ぢやありませんか。私一人をいゝ馬鹿にして、紅白粉を塗つた石ころにして、寢かして置かうといふのですもの。それを私が裏切りしてやるの。

男　葉山さんへの面あてに、あなたも、別に愛を注ぐ人をこしらへやうと仰しやるのですか。

女　まあさうよ。だから私、そら、お手紙にあつた通りね、あなたの愛を受けますわ。うれしうございますわ。

男

ぢやああなたは、復讐の道具として僕を愛して下さるといふのですね。

女　なんですよ、そんなに開きなほつて。構はないぢやありませんか動機は何だつて、愛にさへ變りがなければ。でもあなたそれでは否？　本當に私を思つて下さるなら、復讐の道具になつて下さるくらゐ、何でもない筈ね。愛も得たり、復讐もしたり、一舉兩得とは思はなくて？　ね、それで得心が行つたら、私と一緒になつて復讐をして下さいな。助太刀ぢやありませんか。わたし、あなたを見かけて頼んでよ。

男

それは僕だつて男ですもの、さう言はれゝば嬉しいが――

女

お座なりを言ひつこなしよ。

男

併し、お互に持つてゐる愛を、心の祕密にして抑えて居ればこそ、こんな愛も貴いのでせうが、それを大ぴらにした日には、第一そんな事なんかしてゐられなくなつて了ひます。それかと言つて、ただ秘密にして隱してゐたのぢや、葉山さんに復讐するといふあなたの目的には、役に立たないぢやありませんか。

女

祕密にして抑えて居るなんて、あなたも餘つぽど空想家だわね。

そんな覺束ない愛なんか、何になるものですか。大ぴらになつたら、してお置きなさいな。大ぴらになるのが恐いやうなら、そんな戀なんかしないこと。男といふものは臆病ね。さ、もつと大膽になるものよ、びく〳〵しないでさ、わたしの體を何うにでもして下さいよ。

男

そりや駄目ですよ、あなたの體はもう自由なものぢやありません。あなたの肉體に手をかける事は、このまゝ生きてる限りは出來ません。私たちは、たゞ心の愛をつないで居ればそれでいゝのです。體は此の世の法則に縛らせて置いて、精神だけ自由な天國で思ひ合つてゐたら、理想的ぢやありませんか。

女

理想的だつて、おゝ、可笑しい。そんな生ぬるい事を言つて、あなたも思つたよりは弱い方ねえ。生きてゐられなければ、死んだつて可いぢやありませんか。本當に私を愛して下さるなら、死んで下さいな。死ぬつもりで愛して下さいな。此の體を抱いて下さい。さ、此の手を把つて下さい。さ、此の唇を

（二人覺えず接吻する）

男

（女をつき離して）

あゝ、もう澤山だ、もう澤山だ。之れが行止りです。之れから一足出れば、死ぬ外は無い。僕に其の勇氣はありません。もう之れで澤山です、澤山です。これつきりです。

（ふら〳〵と立ち上り、戸を押してよろけるやうに出て行く）

女

（戸口まで追うて出て）

あなた、卑怯ですよ。私をこゝまでおびき寄せて置いて、これつきりとは何です。それは卑怯といふものよ、卑怯者！　卑怯者！

（外出先から歸つて來た夫が、酒くさい息をしながら立ち現はれる。）

女

あゝ、あなた。今行つたのは淺田のやつ。卑怯者！　わたしを弄ばうとした卑怯者です。卑怯者！　卑怯者！

（向ふを見送りながら夫に縋りつく。夫は驚いて女を抱く。）

幕

競

爭

競　爭（縮圖劇）

場所　或海濵の旅館の裏手、座敷から橋がゝりに濵邊に臨んで建てた涼屋、籐椅子、テーブルなど備付けてある。こゝへ出て居る客は二人きり。

時　初秋の夜

人物　羽庭　田室　清水たまえ

羽庭　もう私達も、そろ〳〵歸り仕度をしなくちやなりませんね。一と月といや長いやうだが、斯うなつて見ると、あつけないものですね。

清水　え、全くですはね。夢のやう、でも羽庭さんは一と月ゐらしつたのですが、私のはまだ、まる三週間にもなりませんよ。

羽庭　さうです〳〵、あなたの入らつしやつたのは、僕等が來てから、ちやうど十日目でした。僕はあれ以來の事を、不思議なほどあざやかにおぼへてゐます。あの晩は、そら、やつぱりこんなやうに暗い晩で、私たちが其暗いのを利用して、濵邊から覗き込んで、下座敷にぐつたりとなつてゐらつしやるあなたを、殘酷なほどよく見ましたつけ。

清水　ほんとにひどい方ねえ、私知つてゐたら、懲らしてあげるのでしたつけ。

羽庭　所がなか〳〵懲らされる段ぢやない、さかさまに、こつちか

ら逆襲しやうといふんですからね。田室と來ちやあ、とてもあなたなんかの及ぶ所ぢやない。人間もあゝづうぐ〳〵しくなつて來ると、たしかに強者ですね、人を征服するに足りますね。

清水　でもあの方のは、たゞ肉的強者なんでせう？靈の征服者にはなれませんわね。

羽庭　さうでせうか？僕も元來その主義なのですが、此節少々不安になつて來ました。世の中はやつぱり肉から征服してかゝらなけりや、負けさうですね。

清水　私、さうは信じませんわ。やつぱし心が先ですよ。肉體的に來る誘惑は一時は強いやうですけど、それだけだと跡が殺風景ですよ、少しもゆかしい所がありません。

羽庭　たとへば……？

清水　たとへは……？

羽庭　あなたが假りにさうした誘惑を受けたとしますかね。

清水　えゝ、ようございます、假りにですよ。

羽庭　假りに。そうしたら、あなたはどうなさるでせう？

清水　わたし？

羽庭　えゝ、

清水　それは知れてますわ。一喝の下に斥けてやります。

羽庭　一喝の下に？

清水　えゝ一喝の下に。

羽庭　はゝ、それはだめだ。僕の見てゐる女といふものは、そこへ

行くと弱いものです。僕が不安に思ふのはそれですよ。

清水　いけません〳〵。それはまだあなたが女の本とうの心持を知つていらつしやらないからです。それはねえ、他に氣を引かれるものが別に何もなくて、そのまあ……男なら男がそれほど厭なのでもないといふ場合なら、それは隨分どんな機で無理から誘惑されてしまふ事が無いとも限りません。けど一方に心をひかれるほどのゆかしいものがあつて、比較するとなれば、いくら一方が肉的な亂暴な事をして來たからつて、さうたやすく自由になるものぢやありませんよ。いくら女だからつて、さう見くびつたものぢやありません。そこへ行けば、男の方こそ却つていくぢが無いといふぢやありませんか。弱いのは男ですよ、

それこそ肉體的誘惑でも受けやうものなら、ぐにや〳〵になつて了ふと言ふから。

羽庭　つまり男は正直なのですね、すぐ眞に受けて了ふのす。

清水　あら、苦しい辯護ね。さうだと、何だか女ばかりが不正直なやうに聞えますよ。いゝ面の皮ですわ。

羽庭　いや、そんな譯ぢやないんです。無論女だつて……あゝ、もう僕は退却しやう、いつでも此邊まで來ると擊退されて了ふんだから、つまらない〳〵。

清水　えゝ？何ですつて？どうおつしやる？

羽庭　……

清水　羽庭さん！擊退ですつて？ほゝゝ、何の事？それは。聞かし

てちやうだい、ね。

羽庭　清水さん！

清水　え、。

羽庭　……

清水　波が光りますこと。あんなに暗くつて、やつぱり何處かに光りがあるのですわね、反射する所を見ると。

羽庭　あの中には發光體のものもゐるのでせう。

清水　さうでせうか？あら〳〵、あんなに光つてよ。それにちつとは星明りもありますわね。……人が減つたせゐだか、淋しくなりましたこと。つい此間までは、どんな暗い晩だつて、人影の絶えたことはなかつたのですが。向ふの家なんか火が消えたやうに森としてゐますわ。それに風の寒いこと、東京ももう秋でせうね。

羽庭　急に歸りたくなつたのでせう？

清水　え、、里心がついてね。けれども實際は歸りたくないの。又あのいやな東京へ歸らなくちやならないかと思ふと、心細い氣持になりますわ。あなた歸りたいでせう？

羽庭　いゝえ、僕はいつまでも斯うしてゐたいと思ふ位だから、東京なんかてんで思ひ出しもしません。清水さんなんか、仕事が仕事だから、いゝ加減こんな所へ來てゐらつしやると、また華やかな都會が戀しくなる筈ですがねえ。音樂會の夢は見ませんか。

清水　ですけれど、羽庭さん……たゞ華やかな席へ出て、人にわい〳〵言はれる位の事で、本當の滿足が得られるでせうか？私の胸の底には、もつと大きな傷が口を明いてるのですよ。そんな上つつらの事で、其傷が癒えるでせうか。……私は東京にゐても淋しいんですよ。それはね、あゝして華手な社會に立ちまじつてゐますと、氣は紛れますけれど、それはたゞ摩醉劑でしびらせたやうなものです、一時忘れてゐるだけの事ですよ。是れからまた、相も變らず、あのピアノ臺にしがみついて……

羽庭　……あゝ、もう、私……

（此途端に田室入り來たる）

でも清水さん、あなたはさうして……

田室　何だかいやにしんねこだね。おい氣をつけえ、羽庭君。清水さんもいけないや。僕がちよつと油斷をすると、もうすぐ是れだから困つちまふ。

清水　何をです？

田室　何だつて彼んだつて、一體いけないや、さう內證話ばかししてゐちやあ。

清水　內證話なんかしやしません、ねえ、羽庭さん。

羽庭　君等には分らない話をしてゐたのさ。

田室　分つてるよ。また例の人生だらう。人生が淋しくて運命が神秘で、そこで、二人は道づれになりませう、てな話だらう？六道の辻で女を拐かすやうな話はよせよ。

清水　田室さん、そんな事を言ふのは、およしなさい。口のわるい！

田室　口はわるくても、腹はこれで極い、ものです。一體口の惡いものは腹は綺麗なものですよ。却つて口のい、奴が油斷がならんて、口のい、奴が。僕なんかのは是れで、口ばつかりですからね。吹拔の鯉と同じです、腹はから〳〵、江戸ッ兒だ、其くせ生れは上方ですがね。

羽庭　あんまり口ばかりでもなささうだよ。少くとも手くらゐはちよい〳〵出します。

田室　おい、人聞のわるい事を言ふなよ。ちよい〳〵手を出しやあ、掏兒の見習だぜ。ねえ、清水さん、向ふの端に火が三つ四つ見えるでせう？

清水　どの邊にですか？私眼がわるくなつたのか知ら。

田室　そうら、此見當、僕と顏を同じ方角に並べて御覽なさい（女を抱くやうにして肩をつけ顏を寄せる）ねえ、見えるでせう？

清水　え、〳〵（女は羽庭の方へ氣を兼ねて、ちよつと身を引く）

田室　あれが、そら、昨日見て置いた出つ端の所ですよ。夜と晝とは方角が違ふやうに見えませう？

清水　まるで違いますのね。

田室　今日、船を出させればよかつたつけ、惜しいことをしました よ。

（此とき羽庭行きかける）

清水　羽庭さん、もうおやすみ？

羽庭　いや、ちよつとそこらをぶらついて來ます。

清水　さう？ぢや行つていらつしやい。

羽庭　あなた、最後の散歩はどうです。

清水　さうですね……

田室　寒くて、しやうがあるものか、およしなさい、およしなさい、

（押し戻すやうに女の肩にさはる）君もよしたらどうだ。ぶらつくのもいゝが、あんまりぶら〳〵して、風でも引くと大變だぜ、避暑に來て、風をひいて歸つちや引き合はない。

清水　寒いたつて、そんなぢやありませんよ。みんなで御一緒に出かけたら？

田室　ちよいと〳〵、後生だから手を貸して下さい、襟！襟！あゝ、たまらん、痛い！くすぐつたい！早く早く。

（女の手を取つて自分の襟元に押し込む）

清水　どうなすつたの？痛むんですか？揉めばいゝんですか？

田室　蟲です〳〵、蟲が這入つたのです。

清水　え？蟲？おゝ、氣味がわるい、

田室　そら、此かなぶんぶんめ、脊中ぢう這ひ廻りやがつて。

清水　かなぶんですか、馬鹿らしい。私また氣味のわるい蟲でも這入つたのかと思つたわ。騷ぎが大きいものだから、びつくらしましたわ。

（此とき羽庭は出て行つた跡である）

田室　はゝ、はゝ、計略が圖にあたつたでせう？羽庭は行つちまひ

ましたよ。

清水　ほんとに人の惡い！

田室　そりやさうと、愈々お分れが近づきましたね。

清水　全く早いものね、今もさう言つた所ですよ、まるで短い夢のやう。

田室　夢にしちやあ、隨分人ぢらしな夢でしたね。

清水　どうして？

田室　どうしてつて、あなたも隨分人が惡い。どこまで行つても、こゝまでお出でで、とうと、あすお立ちといふ所まで引ぱつて來たのだもの。

清水　また田室さんのお極り、そんな事をおつしやると、私もうい

や、行つちまひますよ。

田室　おつと待つて下さい、此まゝ行かれちやあ、元も子も無くしてしまふ。

（女の手を取る、それをそつと除けて）

清水　ほんとにあなたは肉體的ねえ。

田室　え？

清水　いゝえ、こつちの話し、はゝ。

田室　いけないね〳〵。あの羽庭と二人で。無闇と僕を肉體的にして了ふものだから……全體人間といふものが肉體的ぢやありませんか。精神的だの神經的だのつて、そりやあ氣が頭へ上つた奴の言ふ事です。昔から肉體的にならないラヴなんてものが

ありますか。あればそれは、ならないのぢやなくて、なれなかつたのだ。ならせりや、みんな肉體的になつて了ふ。それが惡けりや、第一人間の子孫からして絶やさなくちやなりません。古い理窟さね。

（マッチを摺り卷煙草に火をつけ、あとの燃さしを女と自分の顔の間に掲げて照し見る、双方ちよつと顔を見合つて）

清水　でもあなた、それだけの議論をなさるのは眞面目だわね。

田室　眞面目ですとも、大まじめ。

清水　あなたのやうな人が眞面目におなんなさると、何だか氣の毒ね、滑稽ですわ。

田室　これは怪しからん。（女の兩手を取る、女は笑ひながらすりぬけやうとする、それを固くつかんで）さあ、もう逃しません。人がまじめになつて話してるのを、滑稽だなんて。

清水　だつて、いゝぢやありませんか、私、その滑稽が好きですよ。お、、痛い、お離しなさいてばね、そんな失敬な事をなさると、私、おこりますよ。

（言ひながら尙手を取られたまゝじつとしてゐる）

田室　おこつて下さい、おこらせでもしなくちや、あなたは眞面目になつて呉れないから。羽庭と話する時だけ、いやに生まじめになつてさ。僕に向ふと、まるで態度を一變するんだもの、ひどいや。

清水　あなたがさうさせるのですよ。だつてさうでせう？羽庭さん

のやうに生まじめな話ばかししてゐちや、窮屈でいけないつて、あなたさうおつしやつたでせう？實務家の癖に哲學者のやうな事ばかし言つてゐるつて。

田室　そりや、あなた、いくら眞面目だつて、あゝどうも、人生だの藝術だのばつかし轉がしてゐた日には、たまりませんや。まじめつたつて、まじめになりやうがあります。ちよいと斯う急所々々で眞面目になつてさへ貰へば、それで話は極まらうと言ふものです。

（羽庭歸つて來て入口を這入つたまゝ、立つてゐる、二人は氣がつかぬ）

清水　おゝ暑い、あなた、あんまり接近なさると暑くるしくなるんですよ。もつと離れてゐらつしやい。

田室　さう肱で押さなくつてもいゝでせう。

清水　あら、肱鐵砲？はゝ、はゝ、御免なさいよ。そんな意味ぢやなくてよ。

田室　ねえ、清水さん、僕實際眞面目ですがねえ……

清水　枕辭がつきましたのね。

田室　あなた、あの羽庭と僕とどつちがお好き？

清水　へえ？何ですつて？

田室　僕と羽庭とですよ。

清水　まあ、あなた、隨分亂暴な事をおつしやる方ね。あきれて了ふわ。こんな亂暴な人を、私、見たことが無い。

田室　だつて、それが要點です。事務を敏活ならしめる所以です。

え？

清水　存じませんわ、そんな事。

田室　何もさう、色だの戀だのと言はなくつてもいゝでせう。たゞ友人として、フレンドとしてさ。どちらの柄がお氣に召しますか、中形？絣？それともどちらも木綿ものでお氣に入りませんか？

清水　お答の限りでございません。

田室　僕が好きなら好きだと、遠慮なく言ふことですよ、耻かしがるには及びません。

清水　田室さんてばねえ！私、もういや。

田室　これで分りの早い男ですから、御希望の方はどうか……

清水　もう〳〵田室さんにはかなはない。私もう御免蒙りますよ、あすまたお目にかゝります。

田室　まだいゝでせう？まだ早い（時計を出して見て）九時にならない。もう少しゐらつしやい。もう亂暴な事は申しませんから。

清水　でも、お蔭で今夜はおもしろうございました。

田室　羽庭がゐると尙おもしろかつたのだが。あの男、あれでなかなか……

（羽庭二人の方へ行く）

清水　おや、羽庭さん、いつ歸つてゐらしつて？私ちつとも知りませんでしたわ。

（本能的に二三歩田室の側から離れる）

田室　這入つて來るにまで、しんねこだなあ、君。

羽庭　君の方が夢中で氣がつかなかつたんだよ。

田室　そりやさうだ、どつちかに違ひない。鐘が鳴つたか撞木が鳴つたかさ。そこで？今、君と僕とどつちが清水さんは好きだらうといふ問題を出した所さ。

清水　およしなさいよ、そんな話は。

田室　所が、どつちに團扇が上つたと思ふ？君。

羽庭　どつちにも上らなかつたらうさ。

田室　所が上つたよ、君に。だからおごれと言ふことよ。

清水　あら、いけないのねえ、そんな出たらめばかし言つて。私こまつちまふ。

田室　は、、は、、あんまり喋つて咽が乾いて來た。麥酒でも飲んで來んか。

（行きかける）

羽庭　僕は飲みたくないから、君行つて來たまへ。

田室　つき合へ〳〵。

羽庭　いやだ。

田室　行かないか、頑固な男だな。

（出て行く、羽庭はそれを見送つて、ふりかへり、女と顏を見合はす）

清水　（微笑して）肉體的誘惑！

羽庭　（眼が輝き體がふるへてゐる）僕、さうしてあなたの體を汚さして見ちやゐられない。

清水　あら、體を汚しなんかしませんわ。

羽庭　なあに、今に負けてしまひます。

清水　憚りながら、そんな女ぢやございませんよ。その事、あなたには、よく分つてる筈ぢやありませんか。

羽庭　ですけど、だめですよ。僕は不安です、僕に取つちや貴といあなたですもの、出來るなら、いつまでも其まゝにして、讃美してゐたいのだけれど、人がさうして置かない、危險です……

……どうせさうなるものなら……さうだ！一そ僕が……

（突然女を引よせ烈しく接吻する、女驚いて見上げて）

清水　あゝ！（首を垂れる）

羽庭　さう！……斯うして僕の手で救はせて下さい。肉で肉を防

いでやる！

（再び女を抱く、女は頭を男の胸につける）

（幕）

斷片

斷片

初めのたより

健三様

書けとおつしやれば、手紙は一日に二度でも三度でも書きます。よく人は日文夜文と言ひますけれど、それくらゐ別に驚くことでもありませんわね。お別れしてこのかたの私の想ひが日文くらゐで書きつくせるものなら、こんな寂しい山奥へ來て、こんな苦しみは

爲ない筈ですもの。

たゞのたよりで可いとおつしやつたのね。けれども、今の私にどうしてたゞのたよりなんか書けませう？　親しいお友達にも、宅の兩親にも、葉書一枚出しはしません。なぜでせう？　こはいのですよ。筆を持てば、この胸の想ひがすぐ筆の先に出て來さうで、こはいのですよ。誰れにも〳〵話すまい、たよるまいと誓つた此の想ひが、書くまいとしても出て來るからですよ。口の先でたゞごとばかり言つてゐるのが苦しいものだから、此の頃では、人ともあまり口を利かないやうにしてゐます。たゞのたよりを、而もあなたに、どうして此の私が書かれませう？

本たうの事を書いてよければ、日文夜文も厭ひません。私ね、こ

の頃日記をつけてゐるのですよ。たゞ毎日想つた事をくしやくしやと書きつけるのですけれど、いくら書いても〳〵、私の胸の十分一もすきはしません。あとから〳〵と新しい想ひが詰めかけて來て。そして、それがみんな、あなた一人をあてなのですよ。だから、なら う事なら、日文でも夜文でもいゝから、それを殘らず、つぎ〳〵に書いて送りたいと思ひます。けれどまさかそんな事も出來ませんわね。またいくら書いたつて、それでみんな書いたといふ氣はしないのだから、無駄かも知れません。

あの時あなたは

「どうなるものか別れて見るさ。別れてる以上は音信不通でも構はない。そしてお互の心にはつきりした覺悟がついたら、其の時それ

を明し合つて見るさ」

とおつしやつたのね。そして、お顏を心持あほむけて、二人で見なれたお庭の上の月をじつと御覽なすつた。その眼のうるんでゐた事を、私よくおぼえてゐます。去年の秋の風の冷きつた晩でした。

「私の覺悟はもう極まつてゐたのだ」

とおつしやるから、私が

「どう極めてゐらして？」

と聞いたら

「兄への義理、世間への義理もすまない。けれどもやつぱり思ひ込んだ人も忘れられない。すまない私と忘れられない私とが鬪つてるうちに、もう一人第三の私といふものが出來た。その私はたゞじつ

と二人の爭ひを見てゐる。時によると面白いとさへ思つて眺めてゐる。私の今の覺悟といふのは、それだ。別に覺悟をしやうとして爲たのぢやない。たゞ自然と第三の私になつたのだ。どつちに身方をしろたつて出來ないからの事だ。これでもう十年年を取つてゐたら、すまない〳〵の私に身方して、血管の中で煮える血をじつと抑へて、冷ましたかも知れないし、もう十年若かつたら、一も二もなく其の熱い血の中に飛び込んで了つたらう。けれども今の私は其の眞ん中ほどに立つてゐる。さう此の頃では思ふやうになつた」

つておつしやつたのね。そりや、どうせ世の中はなるやうにしかならないんだから、それもいゝでせう。けれども、さうおつしやるあなたの血は、その時もう半分冷えかゝつてゐたのぢやないでせうか。

私が一そお別れしませうと言つたのも、それを見こしたつもりだつたのですよ。あなたがさうして、御自分で御自分を眺めていらつしやる間に、私といふものは、いつともなく忘れられて、流れに浮いてる花のやうに次第に影が遠くなつて、しまひには見えなくなつて了ふのだらうと思ひました。だから、私、さうされない内に、自分で覺悟がきめたいと思つて、あれつきりつらいお別れをしました。

お別れして、もう二月の餘になりますね。私がこゝへ來て、一番先に何をしたとお思ひなすつて？

私は髮を洗ひました。女湯に人の絶えたころ、岡湯だけ別にバケツに貰つて置いて、初めに温泉で洗ひました。温泉は洗粉がきかないと言ひますが、こゝのはそれ程でもありませんでした。久しく洗

はなかつた上に、途中で砂埃や石炭の粉を被つたものだから、まるで揑ねたやうで、櫛を入れるとざき〳〵と音がしました。でね、やつと一流し洗つて、二度目のお湯を酌みに源泉槽の所へ行くと、全體が暗くて、上の方から差込むやうに明りを取つてある浴室ですから、側に据えてある深い水槽が、ちやうど淺い井戸をのぞくやうに光つて、水鏡を映してゐました。髪から雫を落とすまいと思つて、扱いた髪を根元で左の手に一卷捲き、餘りを横によけて、首を心持ち左に曲げ、水槽の上を覗くと、私ははつとして自分の影に驚きました。髪を洗つてゐる私といふものに初めて氣がついたのです。ねえ、髪を洗つてゐる私。おぼえてゐらつしやるでせう？　縁先に立つて髪をほごしてゐると、見てゐらしたあなたが「僕が解かしてあ

げやう」と言つて、前から元結を切つて下すつて、そしてそのまゝ兩手を私の肩にかけて、捌髪の私の顔を見詰て、眼元でちよつとお笑ひなすつた。私だつて、元結を切つて下さるあひだ、じつとお顔を見つめて、眼と眼の行き合ふのを待つてゐました。たゞお顔があんまり近く來るのに、ちよつとどぎまぎしました。あなたはそれを大へん氣になすつて、いろ〳〵言ひ慰めて下すつてね。けれども初めての事にどぎまぎするのは私の癖なのですよ。だから私はすぐ正氣にかへつて、解かした髪を、ちやうどこんどのやうに、左の手に捲いたまゝ、素直にあなたの胸に顔をつけましたわね。おぼえてゐらつしやるでせう？　あの、忘れてならない最初の紀念を、どうして私は思ひ出さなかつたのでせう？　あれからといふもの、髪を洗

ふ日は私に取つて花のはじめて芽ぐむやうな、うれしい、なつかしい想ひ出になつてゐたのを、何うしてあんなに胴忘れしたのでせう？

さう言へば、この頃私は、時々自分自身を胴忘れしてゐるやうですよ。何事も無かつた昔の心持で、何か平氣な事を考へて、唱歌の譜を鼻唄のやうに歌ひながら、前の山なんか見てゐることがあるのですよ。そして、はつと思つて其の事に氣がつくと、胸がどき〳〵します。何だかそんなに平氣でゐるのが濟まないやうで、もつともつと苦しい事を思つて〳〵思ひつめなくちや、私の責任が果てないやうで、恐ろしい氣がします。

でね、お兄樣が戰地から便りをお斷ちになつた心持を考へたり、濟まないけれども若しか無事でお歸りになつたら、其の時どんな氣

持がするだらう？　私は一番先にどう言はう？　あなたは何とおつしやるだらうか？　そんな事を次から次と考へると、私、もうじつとしてゐられなくなります。どうしても私は生きてお宅の方や家のものに顔は合はされない。ぢや、せめてこゝらで、さつぱりと思ひ切りませうか。今までの事はしかたが無いとして、之れからさき、生れかはつた積りで、お兄樣の前に身を投げ出して、どうともして頂きませうか。假りにさうしたと思つて見ると、ちよつと重荷を卸したやうに樂々した氣持になるはなるけれども、すぐ其のそばから、あなたのお顔が目について來ます。さうなつたあとの私たちは、どんなに寂しいでせう？　そんなにして生きてる甲斐があるでせうか。斯うして別れる氣で出て來ても、眞實別れるやうな心持は少しもな

いのですもの。たゞ離れてゐるのが寂しい一方。

寂しくてたまらない時には、よく裏の谷會を散歩します。まつすぐに見上げる樣な兩方の山が、赭牛の脊のやうな枯肌を競ひ立てゝ、私たつた一人を取り卷いて了つて、其の高い大きな山脈と青空の外には、何も見えはしません。その谷底があの急な川になつて、南向の山の半分から上が眞赤な日を受け、下は二時頃から、もう夕暮の色を漂はせてゐます。土地の氣候は暖かでも、谷川の風は、かなり冷たいのですけれど、それは却つて寂しい時に相應した、いゝ氣持のやうにも思へます。で、わざと肩掛も着ないで出かけて行きますが、人はあんまり見えません。道路からちよいと降りた小蔭の所に、水が大きな岩に堰かれて曲る所があつて、その岩の上に腰をかけて

ゐると、初め耳についてゐた瀬の音が、次第に遠い〳〵聲のやうにぼんやりして行つて、後の枯木山の奥で、ひよ鳥の鳴くのが、はつきりと反響して聞こえて來ます。

前の山の、もう陰つた裾の所に、ちよぼ〳〵とした密柑畑があつて、青い葉の中に、まばらに黄金色の小粒な實が殘つてゐる。それを見て、そして次第に山の頂きの方へ眼を移すと、頂きの邊はまだ日なたぼこりをしてゐます。じつとその邊を見てゐると、何だか寂しい涙が流れて來て、ひとり此の世に取り殘されてるやうな氣になります。いつそあの山の頂邊へ行つて、たつた一人で立つてゐたら、どんなにいゝ氣持だらうと思ひました。

足もとの水はどんゞ〳〵流れて行く。岩にせかれても、川原で狹め

られても、曲つてもくねつても、流れる性はかへないで、自分の意地を通して行きます。私はどうしたらいゝのでせう？

そんな事を考へながら歸つて來て、義務のやうにお湯につかります。はしやぐ時にはしやぎ、沈む時には沈んだ私が、此の頃では、はしやぐ氣持なんか忘れて了ひました。

あなたからのお便りを待ちます。

せんより

中頃のたより

健三樣

一月辛抱して見ましたが、だめでした。私には、寂しくて、とてもあの山奥に長くゐることは出來ません。人を忘れやうと思つて、寂しい所へ來るなんて、全體まちがつてゐますわね。私には元から自然よりも人間の方がなつかしいし、人間の中でも、どちらかと言へば賑かな方が好きだつたのですよ。それが此節では、賑かな人間ばかりが好きだとも思ひません。けれども、まだ人間を振りすてゝ自然の中へ遁れたいとまで決心はつきません。斯うして段々押しつめて行つたら、さうなるのかも知れませんね。けれども、今の私は、まだあんな山奥にゐながら、人間の聲がなつかしくてならなかつたのですよ。

もとの宿の隣の部屋にね、病身らしい若奥さんが長く逗留してゐたのですよ。で、其のおだやかでしとやかな事と言つたら、一日咳拂の聲一つも聞こえはしません。折々お友達が見えての話振なども、實に靜なものでした。元は私、あんな人を見ると腹が立つたものですが、でも今度は感心しましたわ。私もあゝだつたら、どんな苦しい想ひをしても、じつと胸一つに納めて行けるのだらうと思ひました。

でね、とても我慢が爲きれなくて、この海濱へ出て來ました。こゝだつて寂しいのは同じかも知れませんが、何となく海は山よりも人なつこいやうに思はれたのですよ。第一空氣が明るうございますわね。私、また明るい所が好きになつたのですよ。此の邊は、實際まあ何といふ佳い景色でせう？　白い波に乘つて太洋を渡つて來る空

氣が、透きとほつた青玉のやうに冷つこくて、海の香ひが胸をすつきりとさせます。澁色に染めた鰤網を一杯に乾した砂濱や、別莊らしい新築の家の明け放つた南緣へは、美しい日光が勿體ない程澤山に流れかゝつてゐます。私、こゝへ來てから氣が廣くなつた樣に思ひますわ。でね、別れぎはにあなたがおつしやつた言葉の本當の意味が分かりかけたやうな氣がします。あせつたつてしやうがないのですものね。

宿の○○舘に十七八の娘さんがゐましてね、ちよつと愛くるしい顏だちの上に、今がちやうど花やかな血の潮時といふ年で、圓みを持つた頰のしまりや、浮彫のやうになつた胸のあたりの肉附の美しい底に、若さの力が張り切れるやうに漲つてゐます。よく女中の座

敷掃除の手傳などに來て、廊下の縁先から、紫に霞んだ沖の方を見てゐる。其の眼はうるんだやうな光澤を持つてゐます。何でも、去年の春逗留してゐた川田とかいふ大學生のことを忘れ得ないのですつて。で、其の大學生の友人が、今年は川向ふの別の宿へ來たとかで、川田さんもそこへ來るのぢやないかと、毎日のやうに其の友人が町へ出たり、濱邊をあるいたりするのを、氣をつけて見てゐるのださうです。今日も橋を渡つて行く若い人の後姿を見つめて、

「あの大島の着物を着て居る具合が、川田さんに似てゐるわね」

と言つて、懇意な男の客にからかはれてゐました。

あれが本當の戀ですわね。私たちの間のやうに、ひねくれて了つては、だん〳〵しなびて行くばかり。漲つて來る生命は、なるたけ

素直にして、力一杯に活かせて行きたうございますわね。ですけれども、私たちの戀は、初めから、もう捩くれた運命の上をあるいてゐるのだから、無理に手を出してどうすることも出來はしません。捩くれたら捩くれたで、其のまゝ素直に引つぱられて行くより外はありません。思ひたければ死ぬまで思つて行くし、思つてわるければ、自然と思つてゐられなくなるでせう。

こちらへ來て以來、だん〳〵こんな風に考へて來ました。今では自分が自分に對して他人になる工風をしてゐます。私の力では自身を何うすることも出來なくなつたからですよ。でね、やつぱりあなたを思ひつゞけてゐるのですけれど、前よりは安らかな氣持で思つて居るやうになりました。若しお兄樣の事や世間の義理を考へて、

苦しくなつて來ると、つつと離れて遠くから自分を眺めてゐます。私の知つた事ぢやないといふ風にほゝ笑んで見ます。

で此のごろは、前よりも一層はげしく自分の事を胴忘れするやうになりました。自分の今の境遇なんか忘れて了つて、縫いかけて置いた着物の事などを考へてゐます。斯うしてこゝに一二ヶ月もゐたら、私もどうにかなるでせう。何うなるかは私にも分りません。たゞ是れで私もあなたと同じ所まで來たのぢやないかと思ひます。是れから先は、また二人一緒に同じ心持で同じ自分を眺めて暮すのぢやないでせうか？　そして二人一緒に……。私何だかそんな氣がしてなりません。

せんより

柏峠

柏峠

（一）

S生が修善寺に出かけたのは、十二月中旬であつた、着いた日にすぐ土地の案内記を買つて、志してゐた古蹟などを一巡し、賴家の横死、辻姫の遁れ、不越の坂といふやうなローマンスを頭の中に描きながら夕暮に宿に歸つた。

宿は桂川に面してゐて、湯殿も綺麗である。瀨戸で甃んだ湯船に

は、澄み切つた溫泉が溢れてゐる、心持熱い溫度の中に、疲れた體を浸して居ると、溫泉特有の湯の香が微かに鼻を襲うて、ついうとうと眠い氣持になる。

晩食の膳も、齒切のいい刺身や、椎茸の香の高い椀で、可なり深い食慾を刺戟した。

寢床に這入つてからも、しばらくは今日一日の事などを想ひ返して、別に何事もなかつたが、段々あたりが靜まるにつれて、すぐ枕の下を流れる桂川の瀨の音が耳につき初めた、するとそれが後には暴風雨にでも襲はれて居る樣で、折角治りかけてゐた神經がまた興奮して來た。S生はとう〳〵夜の明ける迄一睡もし得なかつた。

翌朝は頭がしびれたやうになつて、遲くまで床を離れるのが懶か

つた。でもやつと起き上がつて、一風呂あびて見たが氣分はまだなほらない。色々と不愉快な事ばかり想ひ出しながら、朝飯を濟ませて、北向の二階の縁に懷手をして立つてゐると、後を立て切つた山と山との峽から、一筋の朝日が、どす黑い川の片隅に差し込んで、そこだけ眩く光つて見える。家鴨が五六羽そこへ寄つて來た、皆な寒さうである、案内記に藥研の底のやうな處と書いてあるが、よく此土地の形勢を言ひ現はしてゐる。日蔭の谷間で、町全體が暗い、そこへ恐ろしく強い霜が降りて、桂川にかゝつた板橋が吳粉で塗つたやうに白く、大湯の湯氣が空しく其の上に立ち淀んでゐる。底冷のする處だ。

S生は、暖な南日の温泉場を想像して來た當が外れて、落ちつか

ない心持になつた。此所はやはり夏場所だ、冬こゝへ來たのは土地の選擇を誤つたものである。のみならず、宿屋の選擇も惡かつたやうだ。來て見ればもつと向のいゝ家などもある。それから此宿の番頭の樣子がいかにも不愉快である。どうせ斯ういふ種類の職業をしてゐるものに、春風の吹くやうな人間は居ないに極まつてゐるが、それにしても、あの番頭とは餘りに性が合はな過ぎる。

斯んな事を考へ出すと、急に此土地がいやになつて、S生は其の日すぐに海岸の伊東へ轉ずることにした。

手を叩いて番頭を呼んで、

「も少し居るつもりだつたが、急に伊東へ行つて見たくなつたから、勘定をして下さい、そして大仁まで車を一臺呼んで下さい。是から

すぐ立ちたいから。」

言つて番頭の顔を見ると、番頭は見る〳〵顔の表情をかへて、今までの世辭笑を引つこめてしまつた。情味の枯れ切つた眼を險しくして。

「手前ごもでは、暫く御逗留のこと、伺つて居りましたが、それは何うも急なお思ひ立ちで、へえ〳〵、伊東と申しましても、隨分と風のひどい所でございましてな。いや何ういたしまして——」

S生はいやな顔だと思ふと、たまらなくいやな心持になつて、默つて了つた。番頭は、でも段々顔色を繕つて行くらしく、手を揉みながら、

「それでは大仁から馬車でいらつしやいますか。車なら大仁までいらつしやらずに、すぐそこの渡しから突つ切りますと、近うございます」

「あゝ、さうですか——併しまあ兎に角大仁まで出て見やう。伊東ではどんな家が善いかねえ。」

「さうでございますな。猪戸で○○、玖須美で△△、みんなよろしうございませう。」

「○屋といふのはどんな家です。」

「○屋もよろしうございます。」

「△館といふのは?。」

「△館もよろしうございます。」

「其のうちで一流といふのは先づどんな所です。」

「さうでございますな、手前精しくは存じませんが、今申したやうな家は、みんな似たり寄つたりでございませう。」

番頭は曖昧な事を言つて、障子をしめて立たうとする。S生は尙追かぶせて。

「大仁から伊東までの馬車賃は何のくらいですか。」

「冷川までたしか――」

言かけて躊躇してゐたが

「三十錢位でございませう。冷川から先はおあるきになつた方が早うございますよ。お勘定は唯今持つて參ります。」

逃げるやうにして下りて行つた。知つて居る癖に、何せあゝ、はき〳〵と物を言ふことを避けるのだらうと、S生は番頭のずるいのが癪に障つてならなかつた。

（二）

大仁から冷川まで三里あまりの間、乘合馬車は冬の枯山を兩側に見て、不揃の路を不揃の足取で、駈けたり休んだりして行く。日蔭の水田には、古株の腐つたのが、みじめに凍てついてゐて、日あたりのよい路傍の百姓家では、縁先に筵を敷いて、水車からでも搗き上げて來たらしい糠まびれの米を廣げてゐた。

馬車に張つてある、大仁組と染ぬいた淺黄の幕が、寒風に煽られて音を立ると、馬丁が吹す惡煙草の香と、汗ばんだ馬の臭氣とが一

緒になつて吹きつけて來る。乘合は、中途の立場まで十五六の小僧一人きりであつた。小僧は、小學校を卒へてから、家でぶら〳〵遊んでゐるとでもいふ風體で、飛白の袷羽織の古びたのを、くるりと捲つて、頭から被り、眼ばかり出して小さくなつて顫へてゐた。

馬丁は、道で人を追ひ越すたびに聲をかけて、

「負けとくから乘つて行かねえか。」

と勸めるが、誰れも乘らうと言ふものが無い。人里にはいると、あの、神經を突き拔くやうな喇叭を、プリミチーヴな節で吹き立てる。併し誰も出て來る者がない。斯うして、荒涼たる冬の村を拔け田を拔けして、馬車は何時果てるとも知れぬ路を駈けて行く。餘りの退窟さに、S生は馬丁に話しかけて、又伊東の事を聞き始めた。

「伊東の○○といふのは善い宿屋かね、」

「○○、さうさなあ、善い宿屋でせう。」

「外に何んな家がいゝかね。」

「大抵同じものさね。」

「○屋△館なんてのは、何うだらう。」

「いゝ宿屋ですよ。」

「東京邊から來るお客が一番多く行くのは、何處らだね。」

「みんな行きますよ。」

「冷川から伊東まで人足賃は幾らの極りかねえ。」

馬丁は聞えない振をしてゐる。S生は

「五十錢も取るかね。」

「さう、幾ら位取るかね。」

「君なんか知つて居さうなものだね。」

「荷物の具合で違びまさあ。」

此の不得要領な問答で、S生は暫く忘れてゐた宿の番頭の事を復た想ひ出した。聲だけで笑つてゐる、あの不愉快な顔が眼先に浮ぶ、そして、此の人達が利益の相互保護の必要に教へられて、他の事をはつきり言ふのを避けるやうになつた道行を考へた。

乘合の小僧が降りてから、冷川まであと一里許りは、いよ／＼S生一人になつた。併し寒さは少し薄らいで來た。と思つてゐると、十間ばかりも駈け出した頃、跡から、一人の女が走せて來た。

「馬車屋さん、乘せてお呉れ。」

馬車が止まると、息をはづませて飛び乘つた、馬丁は女に一瞥を呉れたまゝ、また馬に鞭をあてた。

女はS生の直ぐ向ふの所へ、臆する色もなく投げるやうにして腰を下した。狹苦しい乘合馬車の事だから、少し搖れると、膝と膝とはすぐぶつゝかる。けれども女は平氣である。二十にはまだなつて居ない、引つ詰めた銀杏返に結つて、紡績飛白の羽織を着て、紫色の肩かけを寒さうに顎まで卷いてゐる。頭に差した堆朱まがひの護謨櫛の峯が一點の色彩になつて、人の目を惹いた。赤く艶を持つた丈夫さうな血色が、南海岸の者といふ事を語つてゐる。

S生は女の大膽な態度に興味を持つて話の口を切つて見た。

「姉さんは伊東へ行くのかね。」

「えゝ、伊東へ行きます、旦那もさうですか？」

「えゝ、伊東へ行つて見やうと思ふが、此の先の峠は、あるいて越した方がいゝといふがさうかねえ。」

「さうですよ、馬車ですと新道を廻りますから、大變です。峠つて、何でもありやしません。人足を賴んで其の荷物は擔がせてお越しなさい。」

「人足はすぐあるかねえ。」

「えゝえ、馬車の止まる所でね、茶屋がありますから、そこでさう言へば雇つて呉れます。」

「伊東では宿屋は何所が一等いゝかねえ。」

「向々ですけど、猪戸では○屋と○○が一等大きいでせう。○屋は

手堅い家ですから東京の官員さんなんか、よく泊りますよ。まあ○屋と、それから玖須美で○○○が一等でせうね、○○○は○屋に比べると派出な方です、割に經濟に行くのは玖須美の△△や□□□で せう。△△は商人客が重ですし、□□□には書生さんがよく來ます。五十錢位で行けませう？△館や△△△はかゝりは大きいけれど、淋れてゐますから、お止しなさいまし。」

いかにも直截な物の言ひかたが、今までの番頭や馬丁の狡猾な逃言葉に比べて痛快で、S生には、うれしかつた。

「さうかね、何うも有りがたう。それでよく分かつた。一體姉さんは大變精しいやうだが伊東の人かね。」

「いゝえ。」

「ぢや伊東に居たことがあるのだらう。」
「えゝ、居ました。」
「商賣は何です。」
「私のですか。」
「えゝ。」
「何だか分かりません。商賣なんかありやしません。私の家は土地でやつぱり宿屋をしてゐるんですけれど、そりやもう、木賃宿のやうなものです。」
「土地といふと」
「伊東から少し行つた所ですよ。」
「あゝ、姉さんはそこに居るんだね。」

「いゝえ、さうぢやありません。私のは居所だつて極まつてゐないんですよ。風來人。」
「まさか」
「全くですよ、氣樂者でせう?。居所もなければ、商賣もないなんて。」
「だつて、喰はせて呉れる者が無くちやあ、君。」
「はゝあ、喰ふなんて、そんな事は何んでもありやしません。奉公したつて、女一人喰ひ外す氣づかひは無いんですもの、私なんざ、何所へ行つたつて、ひとりでに人が喰はせて呉れます。氣に入つたら、一年でも半年でも奉公してゐるし、飽きたらずんぐ〳〵好きな所へ行つて了ふし、生れてからまだ喰はせて貰ふ苦勞なんかした事は

ありません。」

言ひ放つて、女は體をゆつたりさせ、間近の行手に聳え立つてゐる柏峠の峯つゞきを、うつとりした眼で見てゐる。S生は

「ふむ」

と言つた切り二人の間の會話は途ぎれて了つた。

（三）

冷川で馬車を下りると、女は馬車賃十錢の所を二十錢銀貨一枚投げ出し、馬丁が

「姉さんごうも有りがたうございます。」

とお辭儀をするのを見向もせず、こちらに向いて一寸會釋したまゝ、すた〳〵と峠の方へ行つて了つた。

S生はそこの旅籠兼帶の茶店で晝食をすませ、人足に鞄をかつがせて、出來るだけゆつくり歩いて、一時間ばかりで柏峠の絶頂に達した。それでも身内には汗がしつとりと滲んで來て、高地でありながら、一足々々氣候が暖になるやうに思はれた。

峠の頂上に一軒の茶店がある。取り敢へず、そこで一休することにして、薄縁を敷いた縁臺に腰を下すと、白髯の美しい爺さんが茶を薦めた、婆さんは蜜柑を盆に盛つて出した。S生は蜜柑を剝きながら、ふと臺所の爐の方を見ると、先の女が爐の端に坐つて、こちらに脊を見せたまゝ、頻りに食事をしてゐる。其の前に同じ年頃の

娘が更盆を持つて飯櫃を控へて、給仕をしながら煤掃の話か何かしてゐる。

S生と人足とは、爺さんと峠の話などをして、十分ばかりも休んでから、下り路に向かつたが、女は其の聲を聞きながら、終に一度もこちらを向かなかつた。

茶店のすぐ横に半丁ばかりの隧道路があつて、それを抜けると、やがて突然眼界が開けて遙の下に伊東の海が紺青に光つて、地平線の邊に圓く盛り上がつて見える。風の肌ざはりが、むうとするやうに思はれた。下り路は早い。山の中腹に沿うて幾たびか迂り曲りするたびに、海が見えたり隱れたりする。兩側に逼つて來る雜木の枯れ山の色が、今までの鼠色なのと違つて、赤味を帶びてゐる。所々

に青草の枯れ殘つたらしい色も見える。藪の中に聞える山雀の聲が、峠の向ふとこちとで、冬と春とを轉づり分けてゐるやうな氣がした。其のうち日光に漬つた伊東の町が間近に見え出して來た。別莊の庭でもあるか、橙の木の黃色な實の盛りこぼれるやうに生つたのが、彼方にも此方にも見える。暖い土地に來たな、といふ感じが切になつた。

伊東に着いたのは二時半であつた。道づれの女が敎へて呉れた猪戸の○屋といふのに落ついて、何よりも先づ湯に這入つた。湯は無臭ですきとほつてゐる。廣い湯殿には磨硝子の窓を通して和かな日光が一杯にさし込んでゐる。湯に浸つてゐると、今朝のいら〳〵した氣持は消えて了つて、ゆつたりとなつて、そし思ふともなく道

ごれの女の身の上を思つて見た。

山戀ひ

山戀ひ

一

甲斐と信濃の山あひで育つた彼女には、金峯山から吹いて來る風の遠鳴りが、胎内にゐた命の初めから二十で嫁入りする夕まで、魂の窓の薄の明りにしみ込んでゐる。東京に住んでからもう十年であるが、夜半に雨戸打つ風の音を聞いても、感じはすぐ胸に通じて、遠いむかしの響を傳へる。「わたしが死んだら魂は屹度山へ還るだら

う」と、いつも自分で言つてゐた。それは今度某選擧區の補缺選擧に代議士の候補者として立つた大原均一の妻千代子である。

其の山あひを想はせる、木枯の淋しい風が今年も赤坂あたりの高臺を吹き廻る頃となつた。

今朝の夜明を合圖に吹き出した東北の風は、後の林から榛や栗の落葉を捲いて、灰色に乾いた玄關先へ打ちつける。そこに見事に苅り込んだ九尺物の檜葉の木の間を拔ければ、南向の裏庭つゞきで、可なり廣い庭も大かたは冬枯の色に變つてゐる。四つ目垣に添へて植えた一本の山茶花が黄昏の薄蒼い窓の障紙に對して紅く咲いてゐる。

其の肱掛窓の障紙がすうつと開いて、面長の白い顔が現れた。最

早はつきりとは見えないが、黑い眼の際立つて大きいのだけはよく分かる。何處ともなく轟つといふ風の音がすると、から〳〵と落葉が地べたを走る。身内がぞつと寒い。

二

障紙の明く少し前の事であつた。千代子は窓の柱に身をもたせかけて、首を垂れたまゝじつと考へこんでゐると、仲働の女が仕切の襖をあけ、次の間に手をつかへて、

「奥樣、お燈を持つてまゐりました。」

と言つて、圓火屋の火を細めたランプを、座敷の眞中に運んで、捻

金を廻はすと、ぱつと差す明が、埋高いほど飾りをつけたニツケルの大臺に輝いてきら〳〵と眩しいやうである。ちよつと此方を振り向いた千代子は、うるさゝうに顔を背けて、

「あちらへ持つて行つてお呉れ。茲へは燈はいらないよ。あゝもう、そのぎら〳〵する仰山らしいランプなんか見ると、わたし、頭がくら〳〵するよ。早く持つて行つてお呉れつてばね。」

仲働は變な顔をして、命令どほりにした。座敷はまた舊の薄暗さにかへつた。すると今度は年增の女中が入り交つて來て、

「あの、車屋がまゐりまして、奥樣の今晩お召になりますお車は、どういたしませうか、若しあの、旦那さまのお車と先方で御一緒でございます樣なら、やつぱり今までの對のにいたしませうし、それ

ともお別々でございますなら、昨日出來てまゐりましたばかりの、新調のがございますから、其の方にいたしませうか、どちらにいたしたものでございませうか、奥様に伺つて呉れと、さう申すのでございますよ。奥さまどちらに遊ばしたものでございませう。いづれお歸りは旦那さまと御一緒でございませうから、やつぱりあれでございませうねえ……。」

「うるさいね、車なんかどんなでもいゝと、さう言つておやり。」

「は、ではよろしいやうに取りはからへとさう申しつけるのでございますか？」

「車なんぞには、もう〳〵乘りたくないよ。」

「まあ奥さま、どう遊ばしたのでございますか？、お加減でも惡い

のぢやございませんか？」

「どこも惡かない。」

「では、車はどういたしませう？。それにもうそろ〳〵お仕度を遊ばさないと、加島さまへお約束の時間が遲くなりはいたしませんか？」

加島といふのは、某政黨の領袖で、今回の選擧の後援となつて大原を引き立てゝゐる人である。

「わたし、そんな話を聞くとぞつとするよ。白々しいお追從を言つて御機嫌を取りに人の家へ行くことなんか、わたし、眞實いやになつた。あゝ、いや〳〵。今までゞもう澤山。」

「それはもう、おつらい事でございませう。われ〳〵と違ひまして、

上つがたには上つがたの御心配がございますからねえ。けれども、旦那さまの御世出遊ばすことでございますから、先がお樂しみでございますわ。それをおほしめしてねえ、どかう今晩は御仕度あそばして……。」

「ほゝ、お前は大層わたしたちを上つがた扱ひにおしだことね。わたしやその上つがたが大きらひ。」

「ほゝゝ奥様、御冗談をおつしやいます。」

といふとき、新參の下女がまた一人出て來て、近ごろやつと敎へられたらしく、そこへべたりと座つたが、ぞんざいな手附で、

「奥さまあの、會社の隅田川さんが見えやして、お目にかゝりたいと申されやす。」

年增の女中は、其あとを引き取つて、

「お辰どん、隅田川さんなんて、そんなお名前の方はない筈だよ。隅田香さんとおつしやるんでせう？」

千代子は言葉を遮つて、

「香さんでも隅田川さんでもいゝや、ねお辰、どうせあんな、人間の袋に空世辭を詰めたやうなやつは、何所へでも据ゑて置けばぴよこ〳〵お辭儀をするわね。あんなものに極まつた名前なんかいりやあしないや。わたし、あんな男を見ると、身が慄へるよ。今は會へませんつて、返しておやり。」

「へ」

と言つて下女は立つた。

「車屋もおかへし、今夜はやめたからいらないつて。」

「でも奥さま、旦那さまが……。」

「旦那さまがどういつたつていゝぢやないか、わたしの乘る車だもの。」

「旦那さまがお待ちでございませうから……。」

「くどいねえ。」

つんとして女中の方へ背を向けて、窓の障紙を開けた。山茶花の咲いてゐる肱掛窓に、面長な白い顔の出たのは此の時である。

三

どうつといふ音が、向ふの丘の上から落ちて來る。見上げると、夕まぐれの薄明るい空に、つきぬけた松の大木が、怪物の蹲つたやうにむく〳〵と黑い影を起こして、風に唸つてゐるのである。

頻りに其の方を眺めて、聞き耳を立てゝゐた千代子は、次第に面を俯せて、山茶花がたゞ一輪赤く咲いてゐるあたりに眼を据ゑた。そしてじつと見つめてゐると、青黑い葉の中に、ぽつちりと赤い其の花が、激しい視線の波動にでも感じたか、ぶる〳〵と搖れるやうで今にも散りさうに思はれた。千代子は、はつと思つて眉を動かすと、何所からともなく「郷次はとう〳〵死んだ、郷次はとう〳〵死んだ」といふ濁聲が風の唸り聲にまじつて聞こえた。途端に木の蔭からつゝと身を見はした人影がある。

見れば先程玄關前で尺八を吹かせて、帶の間の銀貨入れから、ありたけの五十錢銀貨二十錢銀貨を掴み出してやつた、深編笠を被つた物貰ひである。千代子はぎよつとして體を引つこませると、

「奥さんお待ちなさい。郷次は疾くの昔に、氣違になつて死んでしまひました。」

といふ言葉が夕ぐれの空氣にぼかされて沈んで聞こえる。千代子は氣を取り直して、

「そして、お前さんは一體誰れなの？」

「誰れでも構ひますまい。一々あなたの胸に讀めることをいふ虚無僧だと思ひなさりやあ、それで澤山でごわせう。郷次といふ名も、氣違ひになつた事も、死んだ事も、みんな知つてる乞食でごわす。

乞食ぢやあつても、言ふ事はみんな本當でごわすよ。こんな胡亂な裝はしてゐても、水晶の出る土地に生れたわし達だ、曇つた事はいひません。ゆすりにでも來たかと思ひなさるか知らんが、そんな料簡は微塵もない。わしが斯うして來たのは、たつた一言あなたに言傳をいはうと思つたからでごわすよ。郷次は十年の間氣違ひになつて、そしてそれが直ると、ふつと死ぬる氣になつた。其の死ぬる間際まで、唯の一言もあなたを怨むとは言はなかつた。郷次は默つて死んでしまひましたよ。奥さん、わしの用といふのはそれだけでごわす。わかりましたか。」

千代子が驚いてだまつてゐるのを見て、虚無僧は夕靄に包まれた門の潜りから、跡をも振向かないで出て行つた。と思ふと、榛の木

林の方へ、町はづれの街道を淋しさうにぼろろと吹いて行く尺八の音が、風につれて聞こえて來た。耳を傾けて聽いてゐた千代子は、すつと椽側に出て、庭下駄をつゝかけて笛の音の跡を追うた。

四

街道を右によけた雜木林の暗い中に、女は栗の大木を背にして、男はそれに向かつて立つてゐる。

まばらになつた枯葉の間からは、冷く澄んだ空が透けて、吹き曝らされた幾點かの星影が見える。暮れるにつれて風がぱたりと休み あたりは一しほ森として、朽葉の香ひが鼻を打つて來る。

「十年のあひだ郷次がどんな事をしてゐたか、あなたは知んなさるまい。あれが氣の觸れた始めが、ちやうど今夜のやうな晩でごわした。からつと晴れた星空に、風が馬鹿に吹きやがる。あなたの家の横手の往來は、土が灰色に乾からびて、折をり枯れつ葉がが〳〵と捲くれて通る。其の中を夜中被り物もしないで行つたり來たりして、しまいには的もなく駈け廻つてゐましたが、夜が明けると、姿が見えなくなつた。それから後の郷次は、もう舊の郷次ぢやなかつたのでごわすよ。」

言つて虛無僧は肩をふるはせたが、また言葉をつゞける

「それも其の筈ぢやあごわせんか。たしかあなたは十七の時、村長さんの一人娘が山ばいりが好きで、人を連れないで、男のやうに峯

から峯へと駈け廻はんなさる。其のうちにとう〳〵騒ぎが起こつて、あれは九月の廿日の晩でごわした。晩飯時になつても歸つて來なさらん。さあ人を集めて村中を探がす。といつても夜の事ではあるし、誰も山の中まで踏み込んで見やうと云ひ出すものはない。その時にせつひわしがといつて、一番に山の方へ駈けだしたものは、おとなしいで評判の郷次でごわしたよ、日頃からあなたの好いて行きなさる方角は知つてゐるし、とうとう御嶽の方へ外れた溪合ひで、疲れて途方にくれてゐなさるあなたを見つけて、一里に近い山路を負つて戻つて來た。

あの晩は月夜でごわした。辿り辿つて、やつと、いつもの道の見える、あの突き出た岩の上へ來た時は、流れるやうなお月さんの光

りが、煙に浸つた目下の村を撫でつけてゐる。しつとりと出た身内の汗に、冷々と夜風が吹いて、あゝいゝ氣持だと思ふと、背中に負つてる人の髪の油の香がする。其の亂れた毛筋が自分の頰まで垂れて、耳元に暖かな息のかゝるのが分かると、郷次は總身にぶる〳〵と慄へが來ました。

あゝ奥さん、それからあとは言ひますまい。四年があひだといふもの、郷次のたつた一つの生き甲斐は、「有りがたい」と言つて下さつたあなたの一言と、顔を合はすたびに潤むあなたの眼が、何だか胸にこたえる。郷次もしまいには、あなたを見ると、たゞ何となく涙が出るやうになりました。

けれども一方は村長さんの一人娘で、一方は其の日稼ぎの日傭取

りであつて見りやあ、何うすることも出來ない。心を割つて見せたら、何所の何方が來たつて負けるものぢややごわせんが、身分といふやつが憎い邪魔でごわした。その中に四年立ちました。するとある朝、郷次は耳元で早鐘を撞き出されたやうな噂を聞いた。お千代さんは、やり手といふ評判の、あの小學校の校長さんと夫婦になつて、東京へ出なさるさうだ。斯う聞いた時の郷次の胸は何んなでごわしたらう?。

村長さんの宅で祝言の晩が、郷次の氣違ひになつた晩でごわした。氣違になつてからの郷次は、名でも忘れたか、お千代さんの事は口にも出さなかつたさうでごわすが、あいつの氣では、名で覺えてるやうな、そんな上つゝらの思ひぢやあなかつたのでごわせうよ。あ

いつの胸には、其の人の正體がそつくり納めてあつた。名なんざあどうでもよかつたのでごわせう。それで、何所で貰つて來たか、古い書物を何冊も持つてゐて、時々それを出して見ちやあ、何だか分らん事を口の内で言ふ。どうしたのだと聞くと、讀んでるのだといふ。今に見ろ、おれも斯うやつて、大先生になつて見せる。何だ、おれとあの大原先生とは、たゞ是れんばかしの青表紙の違ひぢやあないか、おれが今にこれを讀んでしまつたら、あとは五分々々の相撲だ。この青表紙さへなけりやあ、こつちあ八千尺の金峯山の風に育てられた、清しい男だ、曲りくねつたあの校長先生なんぞに、ひけは取らないと、氣違ひに似合はん理窟を言つたさうでごわす。

其の氣違ひが、どうした機か、此の頃ひよつこりと治りました。

治つて見りやあ間の十年は他の世で見た夢のやうで、世間は其の頃のお下げが島田に結ふほど變つてゐても、自分だけは、一昔前がすぐ昨日のやうに思はれて、忘れた事はまるで、忘てゐるが、覺えてゐることははつきりと覺えてゐる。それでふつと死なうといふ氣になつたのでごわす。何ういふ譯で死にたくなつたかは、自分にも分かりませんが、大かた十年前のあの晩に、思ひせまつて死ぬと決心をしたのでごわせう。所がいよ〳〵といふ間際に氣が狂つて、決心をぽろりと忘れてしまつて、十年おもしろおかしく生き延びた。それが正氣に立ち戻つて見ると、前の決心のつゞきが直ぐそこへ繋がつて來る。前の世の因果とでもいつた風に、否應なしに心をその方へ引つ張つて行つたのでごわす。だから死ぬるときの郷次は、誰れ

を怨んだといふでもない。また誰れが留めたつて留まるものでもない。油の切れた行燈のやうに、すうつと消えて行くべきに極まつてゐたのでごわす。たゞわしはねえ、親しいもの〻好みで、此の世にたつた一人のあなたに、かはいさうだと一言言つてもらつたら、死んだものも定めて浮ぶだらうと思ひましてね、斯うやつて打ち明け話をしたのでごわす。あゝ郷次はとう〳〵死にました。思つてならない人を思ふために、始めの二十幾年といふものを人間で育つて、それから十年は浮世離れのした氣樂な世界で過ごし、愈々死ぬために、も一度ふらりと人間に戻つて來た。斯う考へて見りやあ、郷次の一生もおもしろいぢやごわせんか。

奥さんよく聽いて下さつた。風でもおひきなさつちやあわるうご

わす、さあお歸んなさい。わしも是れでお暇を申します。」

男が飄然として立ち去らうとするのを千代子は引きとめて、

「よく話してお吳れだつた。わたしや嬉しいよ、お禮をいひます。若しひよつと鄕次さんがまだ死なゝいでゞもゐたら、せめて其の氣樂な氣違ひの世界でゞも、一度逢ひたかつたと、さう傳言してお吳れ。わたしもねえ、今ぢや、育つた山の中がしみじみと戀しくなつたよ。お前さんは御存じもなからうが、ふとした意地からあゝして大原と一緒になりはなつたが、其のあくる日から、わたしはもうもとの素直な、竹のやうなお千代ではなくなつたのだよ。あれから東京へ出て、一番がけに傳手を求めてなつたのが何だとお思ひか、耶蘇敎の牧師ぢやないか。わたしは牧師の妻君といふので、急に癇聲

を出して讃美歌を歌ふことも習へば、敎會堂の入口に立つて、刷物を配ることも覺える。日曜日に集まつて來る女學生仕立のお孃さん方と、山育ちのわたしとは、話の合はう筈がない。それを此方が物を知らないからと思つて下手に出て御機嫌を取れば、向ふはお客さまか何かのつもりで、「あの大原さんのお神さんちよいと」なんて馬鹿にするぢやないか。それを大原までが、一緒になつて御機嫌を取つて行く。言ふに言へないつらい思ひをして、やつと信用もついたかと思へば、今度は社會改良とやらの演說をするやうになつて、折角急ごしらへの耶蘇敎信者が、いつの間にか政治家と新聞記者の合ひの子見たいな商賣にかはつちやつて、あくる目もない思ひをして行くうちに、會社の株なんぞちよい〳〵と貰ふやうになつて、內は

少しは樂になつたけれど、金の融通が利くやうになると、こんどは紳士だの紳商だのつて、違つた名をつけて、違つた見えを張つて行かなくちやならない。お金が出來てまあよかつたと思へば、代議士の運動がはじまる。一萬圓のものは十萬圓にも百萬圓にも見せて、見えと機關で綱渡りをして今日が日まで送つたが、つく〳〵考へて見りや、わたし達は何のために生きてゐるんだか分らないぢやないかね。それは、大原は、あの通り野心の強い人だから、自分がすきであがいて行くのだし、小學校の校長から今の身分にまでなれば、大した立身さねえ。けれどつまらないのはわたしぢやないか。何時が果てだか知れない大原の野心に引つぱられて、一段上がればもうすぐ其の次の足場に取りかゝる、幾ら上つても〳〵是でいゝといふ

時はありやしない。絹の着物を着て、大きな玄關を構へて、旦那さま奥樣とあそばせごかしにされてゐれば、人は羨ましい身分だと思ふか知らないが、そんな事が本當の仕合はせでも何でもありやしない。

氣がついて見れば、わたしはつく〳〵今の身分が厭になるよ、わたしはもう疲れちやつたの、今一度生まれた山の中に歸つて、あの甘い溪の水を飲んで、青い山蔭の空氣を吸うて、身も心もさつぱりとして死にたい……わたしは、斯んな事を考へてると言つてね、若し生きてゐたら鄕次さんに言つてをしてお呉れ……。」

「分かりました、よく分かりました。それぢやあ是れがお分かれでごわすよ。」

虚無僧と千代子とは、潮合に漂うてゐた二つの浮木が、不圖流れ寄つてまたゆらゆらと分かれ行くやうに、夜の街道を北と南に別かれて了つた。

五

「夫に面皮を缺かせて、立身の邪魔をするとは、何といふ不心得な事だ。厭なら厭で、始めからさう言へばいゝぢやないか。約束をして置いて、向ふではそれがためにわざ〳〵仕度までして待つて居たのを、斷はりもなしに待ぼけを喰はすなんて、物を知らんにも程がある。」

「それは重々わたしが惡いのですと、さう言つてるぢやありませんか。けれども厭で仕やうが無かつたから、止したのです。わたし、もうあんなお勤めは出來なくなつたのですよ。」

「小供のやうな事を言つてるぢやないか。何だつて勤めとなりやあ厭なものさ、それを辛抱してやればこそ後に芽が吹くのだ。ぢやあお前は、わたしの身はどうなつても構はんといふのか。」

「構はないとは言ひませんが、あなただつて餘りあがき過ぎますよ。」

「何だと？　あがき過ぎると？　ぢやあお前にはわたしの出世がうれしくはないのだね？。」

「はい。」

「驚いた。」

「大臣の妻になつたからつて、それが女の仕合せとは限りませんよ。」

「うん分かつた、では何だな、わたしがお前に不親切だといふのだな。わたしは隨分お前には出來るだけの事はしてゐるつもりだよ。」

「其の親切はよく分かつてます。けれども、たゞ樂に暮させて、贅澤をさせて貰ふだけの親切ならちつとも有りがたいものぢやありません。あなたはあんまり世間の方へ氣を取られ過ぎておいでなさるのです。わたしが一人でどんな辛い思ひをしてゐるかといふ事を、ちつとも考へて下さらない……。」

「お前にどんな辛い思ひをさせた？　此の大原均一は三十幾つになるまでまだ妾狂ひ一つした事はないよ。」

「それは分かつてますさ。そんな事をわたし言つてやしない。」

「ぢやあ何だ？　わたしの身分には不相應なまでに、金もかけて立派に大原夫人として交際社會に出してやる……。」

「それをあなたは有りがたい事と思つてゐらつしやるの？。」

「うれしくはないのか。」

「ほゝ、それが嬉しいやうなら、わたし何も言ひはしない。」

「お前の言ふ事は、わたしには分らない。」

大原はぷいと立つて、車を呼ばせて出て行つた。

千代子はそのまゝ柱に身をもたせ、懷手をしてじつと考へ込んだが、

「わたしとあの人の考は、同じ世界に住んでる者とは思へないほど違つてる。」

と思つた。そして生欠伸を一つした。

六

「わたくしは、逃げも隠れもいたすものには候はず、たゞ山へ歸りたき一心の我がまゝとおぼしめし下さるべく候。かしこにて命ある限りは此の身ひとりを清くすごしたき願ひに候。あなたさまを嫌ふのでもなければ、浮きたる心にはなほさら無之候。あなたさまの御親切はよく〳〵承知いたし居り候。たゞあなたさまには立身といふ

思ひ者がつき纏ひ居り、わたくしはそれが嫉く、それに苦しめられてお別れ申事に思ひ定め申候。あなたさまが立身なさるゝにつれ、わたくしは自分の田舍育ちの身がつらく、だん〴〵肩身狹く相成り申候。上部ばかりを人並に着飾りて、當世の貴婦人がたに立ち交はり行き候事、わたくしには何ぼうにも辛く、集會などにまゐり候たびに、傍のお世辭までがわたくしを嘲笑ひ居るとしか思はれず候。それがためおのづとあなたさまの面皮を欲かすやうなことも起こり、まことに相すみ申さず候。さりとて此年になりて、人樣のやうに學校ばいりなどは、迚もわたくしの性分にては出來ず候。もと〳〵わたくしのやうな者があなたさまと一緒になり候こと、わたくしの過ちに候へば、此の上は、自分で身を引き、元の山住ひに歸り

て、一生を野生ひのまゝに暮したく候。今のあなたの御身分にては、どのやうな善い所からでも縁談これあるべく候へば、跡には御身分に似合ふやうな奥さまを御むかへなされて、思ひのまゝに立身なされ候やう念じ上げ候。　千代より。」

といふ一封を殘して、千代子が親里へ歸つた日は、ちやうど郷次が荒川筋で水死したといふ噂の村中に姦しい最中であつた。併し千代子はそれを聞いて別に驚きもしなかつた。

久しぶりで懐かしい山の裾に出て見れば、今さらのやうに新しい景色が目につく。どちらを向ても大浪の天を限るやうに聳え立つた山脈が、赭牛の背のやうに冬の瘦を見せて長々と其の脚を淡い日向に投げ出してゐる。其の中にぽつりと動いてゐるものは自分の影ば

かりで、傷ましい淋しい中の平和さと言つたら、譬へやうのない氣持である。はつきりと澄み切つた空には、山の嶺が色々の形に輪廓を染め出して、其の線の曲り具合の大膽なこと、とても人間の小細工で眞似の出來るものではない。あたりの空氣は清冽な水のやうに體に透き通つて、微な土の香ひがさまざまの事を想ひ出させる。うつとりしてゐた千代子は、

「あゝ活きかへつたやうだ」

とつぶやいて、ほろ〳〵と涙をおとした。

甲信の山あひでは、斯んな事が人々の噂の舌を動かし、想像の胸を躍らせて、其の靜かな空氣を騷がせて居る間、大原均一は、家出した妻の手紙を見て、一時は悄然として首を垂れてゐたが、やがて振

り上げた顔には我慢の色を漲らして、にやりと淋しげに笑つた。そしてまたいつものやうに車を命じた。（終り）

小品五篇

S君

十一月上旬に、學校の校友會で千葉へ演說に引き出された。稻毛の海氣館の前から千葉の町まで一里足らずの間をあるいて行く。同勢五六人の內、私とS君とは街道の右側を磯づたひにぶら〳〵やつて行つた。二人とも洋服であるが、小春日和の正午に近い日光が黃色に照りつけて來て、外套が荷厄介になる程の暖かさだ。一方は松林の丘が土手のやうに續いて、風を防いでゐる。鈍色に光つた海は、おつとりとして、音一つ立てない、房州の岬が灰色雲のやうに浮んで、空は桔梗色に澄んでゐた。今朝汽車の中での寒さに縮み上つた

筋肉が、よい心持にたるんで來て、うと〳〵と夢心地にでもなりさうに、二人とも唯默つて足並を揃へて行くと、ざく〳〵と砂の割れる音が耳につく。折々ぷんと磯臭ひ香がして、眠りかけた神經を覺させる。

「君此の香を嗅くと西洋へ行つた時の船の事を想ひ出しはしないか」と話しかけても、元來無口なS君は「ああ」と言つて一寸愛嬌笑ひを見せたまゝ、復た押しだまつて了ふ。私とても餘り話のある方でないから、また暫く無言が續く。行手の海面には、家鴨の子が何十羽か頸を揃へて長閑に浮いてゐる。

「歸つてからちつとは芝居でも見るかね」と話しかけても、答はやつぱり簡短で「いゝや、餘んまり、さう見ない」と言つたり切り口

をつぐむ。S君と私とは法學と文學と專門は丸で違ふけれども、ベルリンで一年餘り同じ學校の留學生といふ關係から親しくしたのが始りて、今も○○○の講師室で會へば寄つて話すといふ仲なのだが、君の無口といつたら絶對的無口と言つてよい位である。いつも獨で深く沈默してゐて、それで憂鬱といふのぢやない。心の中には一種の滿足を持つてゐる、自分で何も彼も仕末をつけてゐるといふ容子だ。何時も溫乎たる應對振りで、小さい底力のある聲で、ぽつ〳〵と用事だけ話す。此の人が西洋から歸つて、もう二年にもならう、其の間に博士にもなつた。それが此の節何となく淋しさうに見えてゐる。今は獨身で下宿して居ると聞いた。

「でも音樂會に位は行くんだらう」

「いゝや餘んまり行かん」

「よく、それで淋しくないね」

「うゝ」

「獨逸では、よくオペラや芝居に行つたけね」

「あゝ、行たねえ」

「ベルリンから近頃變つた便でもないか」

「何もない、近頃新聞もあんまり見ないもんだから」

是れでまた暫く話が切れた。向ふの方では、他の連中が日向ぼつこに出た蛇を見つけて殺したとやらで、ステッキの先に引つかけて騒いでゐる。其の蛇の死骸の蒼白い腹が日を受けてぎら〳〵と光つて見えた。

「グリュネワルトへK君なぞと一緒に寫眞をりに行つたのは丁度こんな天氣だつたと思ふが、君もあの時は一緒だつたか知ら」

「あゝ、一緒に行つた」

「あの時の寫眞を君にも上げたかねえ、それ、あの、大きな幹ばかり寫つた森の中に皆んなが立つて居て、其の邊の小供に機械を押させたやつ」

「あゝ、貰つた〳〵。あれはいゝ寫眞だね」

と言つたS君はしばらく考へ込んでゐたが、今度は稍勢づいて、

「あの頃の寫眞はみんな保存して居るよ。あれは君、消えるかねえ」

「消えるかも知れないよ、素人のは藥の具合が怪しいからね」

「寫眞を見ると、一番あの時分の事を想ひ出す」

「想ひ出すだらう？　生活を豐富にして行くといふ點ぢや、何といつても西洋の方が意味が多いからね。印象が強く跡に殘る。オペラもビールも無い生活は淋しい譯ぢやないか」

「さう」

「寒い晩、遲くオペラから歸りがけに、よくアッシンガーへ寄つて腸詰の立喰ひをしたが、覺えてゐるかね」

「うゝ、熱いやつを二本づゝ皿に盛つて貰つてねえ、人の少ない隅つこの方の、臺の前で吹き吹き喰つたが、うまかつたねえ」

「そして冷たいビールをぐうつとやるといゝ加減に暖になつてね」

「あゝ」

「うちへ歸ると、いつも十二時を過ぎて居たらう」

「さうだ」

「あのフリードリヒの通りがまた、馬鹿に明るい所と暗い所とある通りだつたな」

「さうだつたかねえ」

「オペラの盛んな音樂や強い色彩がまだ頭に殘つて居て消えない所へ、ビールの氣がまじるんだから、何だか夢のやうな心持になつてねえ、明るい所へ出れば何とも言へない華やかな空想が起こるし、暗い所へ來ると、秘密といふものが無限に斯う、人生をそゝつて來るやうな氣がして、あの歸り途の趣きは今でも忘れられんね」

「日本の芝居では到底あんな事はあるまい。」

「我々には駄目だけれどね」

「僕ねえ、此頃折々俗曲を聽きに行くが、一寸おもしろいよ。何時かも寄席で水戸藝者の唄ふのを聞いた」

「あゝ、さうか、それは面白いが、何ういふ點が氣に入つた」

「なに、たゞ、自然に我々の同感でくる感情を唄ふのだから、それに節がおもしろい。」

言つてS君はちよつと考へて、

「けれども到底西洋のやうなものは無い」

「二十文でヴルストの立喰ひをするだけでも、も一度西洋に行く値打があるね」

「うゝ」

何時か千葉の町が烟つたやうに見えて來た。ごた〳〵とした屋根

が半面、白く日光を反射してゐる。物の十分も默つて足を急がせてゐるとS君は、思ひ出したやうに

「日本にも早く西洋のやうなオペラやカフェーがでくるといゝんだがねえ」

と言つて淋しく笑つた。

（終）

松と按摩

「やい〳〵もつと力を出せい、ずつと肩を入れて。屁つぴり腰をするない。今からそんな意氣地の無い眞似を爲やあがつて。」

「待つて吳んねえよ、待つて吳んねえよ。おゝ痛てえ。棒の間に肩が挾まりやあがつたんだよ。」

「やい〳〵、ちつとも上らねえぢやあ無いか。定公、房さん、もつとやつて吳んねえよ、仕事を爲て吳んねえよ、仕事を。」

「やつてるだよ。お前の方が持ち上がらねえで無えか。何してるんだ。可けね〳〵。後から押つかぶさつて何うするだ。」

「待つた、〳〵。心が折れる。其の枝を延しちやあ可けねえ。友、その繩を持つて來い。よし來た。丸太を尙一本根に入れう。それ、肩を貸して呉んねえ。そうだ。うんとしよう。」

× × × × × ×

「お座敷の外が大變な騷ぎですな。植木屋が庭樹を入れてゐるのでせうか。」

「植木屋ですけどね、前に植つてゐた樹を、他へ持つて行くのですよ。」

「あゝさうでございますか。此のお屋敷の前には、大きな松があつたやうに聞きますが、其の木でも他へ賣れましたかな。」

「さうなのですよ。大屋さんが何處とかの別莊へ賣つたのださうですよ。」

「賣りましたか、さうですか。其の側にたしか柊の大木もございませう。」

「按摩さん、よく御存じね。元から此の家を知つてたのですか。」

「いや、家は存じませんが、そんなやうに聞いて居りました。此の家は古い家でしてね、木柱なども大分煤けて居りませうな。藁屋根だといひますから、軒が低くて、暗くはございませんか。」

「どうしてもね、百姓家だと、別莊建の家なんかのやうには行きませんよ。それに柱だつて、帶戸だつて、眞つ黑に拭込んであるのですから、暗いは暗いけれど、何處か落ちついてゐますよ南の一方明きで、後の帶戸を明けると、暗い廊下があつたりなんかして、初の

うちは何だか氣味が惡いやうでしたけど、馴れて了へば氣にもならなくなりますのよ。たゞ神棚の多い家ですことねえ。何の間にも、何の間にも、神樣の祭つてない部屋は無いんだから、私達のやうな、神樣も佛樣も居ない家に住みつけたものには、變でねえ。」

「はゝゝ、それは何でせう、此の家の元の主人が船乘でしたから、多分それで餘計に擔いだのでせう。先年伊豆の沖で亡くなりまして な。上さんは今たしか電車の通りで小間物を商つて居りませう。」

「さうです、中田といふ後家さんでね。」

「はあ〳〵……」

× × × × ×

「待つた〳〵〳〵。そうつと卸して呉れ。しめた、そこまで上がり

やもう大丈夫。一服やらう。」

「ほら、〳〵。姉さん、ハイカラ髷が枝に引つ懸らあ。氣を付けて行きねえ。そんなに大股に跨ぐと、引つさばけるぜ、おい。」

「大きにお世話だよ。」

「いやにぷん〳〵香はせて行きやがるな。あゝ、善い香ひだ。何所の女中だい。」

「そこの武田さまに手傳に來てゐる、幸町の魚屋の娘だあな。十四くれえからお前、男をこさやあがつて、手におへねえ女よ。」

「だが、ちよつと好い女だなあ。」

「生意氣言ふない。友公、手前なんざ、そこいらの溝で目高でもすくつて居ろい。」

「今日の風はいやに生温つこいなあ。もつとも、もう追つつけ櫻が咲かうつてんだから、暖になつて善い譯だなあ。」

「浪が隨分高けえな、そら見ねえ、浪頭があの小松の丁邊を越して見えらあ。まだ當分不漁かな。厭になつちまふ。鰤でもいゝから、刺身の赤いやつで一杯やりたいもんだ。噛むと冷つと奥齒に卷きつくやうな奴でなあ。」

「時に親方、あの樹はあれで、何の位でお屋敷に這入るんだね。」

「そりや、お前、あれ位の木になると、五兩と十兩ぢや中々手に這入らねえや。」

「さうだらうなあ、大した木だ。是れで餘つぽどの年數だらう。」

「さうよなあ……。だが是れで此の木も浮ばれるといふものよ。天

縣といやあお前、天子樣を除けちやあ日本一の人だ。其の人に見られやうてんだから、今までのやうに汐風の吹き曝らしで、茲いらの……、何たあ違はあな。立身だあな。」

「違へねえ。茲の家にや元武田さまが居たんだな。それあの、今向ふへ越してる華族よ。」

「華族？、華族がこんな家にやあ居めえ。」

「なあにほんの二月ばか居て引つ越したんだがな、何でも子爵だと言ふぜ。」

「子爵？　へん、それぢやあ、公爵たあ比べ物にならねいや。」

「違へねえ。ごら、暗くならない内に濱まで出しとかうぜ。」

× × × × × ×

「はゝゝ、天縣さまの別莊へ行くのと見えますが、何うですかな、松が立身して喜んでますかな。」

「此の家は、あの松がないと、却つて明るくつていゝでせうよ。」

「さやうですね。明るくはなりませうな。その代り夏はお困りでせう。あれだけの樹が一本お座敷の前に立つてゐますと、ずつともう、御門の入口あたりから空氣の感じが違ひます。それに第一、あれ位の松ですと、自然に風を呼びますからな。」

「そんなものですかねえ。按摩さんの方が却つて朝夕見てゐる者よりも精しいのね。樹の恰好なぞも大概察しがつきますか。」

「えゝえ、分りますとも。同じ風を受けましても木によつて皆その音が違ひます。大きい木、小さい木、葉のつき具合、枝のさし具合

で、音が違ひます。たゞ大きい音ばかり聞いてゐらつしやると、ざあ〳〵言ふばかりで何の藝もありませんが、是れで夜世間が靜まつてから、よく〳〵聞いて御覽遊ばすと、同んなじ松風のおとでも、風の動く具合で色々な細かい音を出します。私どもは何時も世間が夜ですから、そんな風にしてでも聞き覺えませんと、物の色合が分かりません。」

「成程ねえ。」

「はゝゝ。」

（終）

野犬

少し神經が高ぶつて眠られない夜など、床の中で考へて見ると、日本の家屋で最も不快なのは天井と床下である。あの薄い四分板を一重並べたばかりの天井上では、鼠、鼬、蛇の類が勝手に荒れ廻はり糞をする、尿をする、喰ひ餘したものを腐らせる。それがすぐ我々の頭の上に溜つてゐるのだと思へば、堪らなく不快である。

先年信州淺間の温泉宿に二三日滯留したことがあつた。夏の終りの事で、二階の部屋は殆どすべて空いてゐた。夜などは實に森としたものである。十時すぎに、一風呂あびて、がらんとした廊下づた

ひに上つて來ると、ちやうど自分等の室の襖を明けて這入らうとする途端、妻が差し延べた手の甲に赤い絹糸を引いたやうな血のとばしりが散かかつて來た。電燈に透かし見た妻は覺えず顔の色を變へて、私の眼前へ其の手を突きつけた。私もぎよつとして方々を見廻したが別に異變のあらう筈はない。床の間にかゝつた墨繪の虎の軸が、此の場合あんまり氣持よく無かつたくらゐのことである。變ですねと言ひながら妻は茶を入れる、わたしは机の前に坐つたが、どうも其の晩は淋しかつた。天井上で、夜中鼠のあばれた樣子から察すると、多分鼠が鼬か何かに嚙まれて、その血がちやうど手の上にしたゝつたのであらうと思ふ。

床下は天井上ほど汚くは無いが、こゝにも犬や猫が魚の腸や鳥の

頭などを喰へ込んで腐らせて置くことがよくある。それを防ぐために、私の家は必ず床下を四方とも板で張らせて、空氣抜の穴には金網をかけるのが例である。ところが、去年の秋引移つた新宅は、何うした手落か、大工が一箇所だけ圍を爲忘れた爲、そこから野犬が一疋出入りをして、六疊間の床下に兒を生んだ。

私の住んでゐる戸山原附近には何十疋といふ野犬が群てゐて、晝は人目を避けて、藪蔭や畠中などに隠れ、夜になつて射的場に落ち散つた兵隊さんの辨當殼を漁りに出かける。そして通行人に吠えつく、警察の野犬獵も此れには手がつかないといふ。

交尾期になると、一疋の雌犬の跡を追つかけて、五疋も十疋もの雄犬が野原の中をあつちへこつちへ大浪のやうに狂奔してゐる。

床下に兒を生んだのは、此等の雌犬の中でも有名なのであるといふ。小形で腹が白く、脇から背へかけて段々濃い灰色になり。尾は太く垂れてゐる。此の雌犬一疋の爲に此の邊に野犬が殖え、また集まつて來るといふので、三四年來近所の人々に睨まれてゐるが、不思議に此の犬だけは犬殺の手にかゝらない。それが私の家に巣を作つたのだから、今度こそはといふので、近所の職人が兒を枷に引つ捉へて撲殺しやうと言つて來た。

併し私の家ではそれを斷つて、兒犬が少し大きくなれば、親犬につけて出して了ふから、其の時にして呉れといふ事にした。乳を含ませに來る親犬を、合圖して殺させるのは慘いといふのが家内中の意見であつた。兒犬が獨りあるきの出來るまで宿を貸してやること

にしたのである。

兒犬は三疋らしいが、其の中の一疋が圖拔けてよく發育してゐた。親犬は日中はめつたに人目にかゝらない、何處か遠方へ餌をあさりに行つて、乳を拵へては歸つて來て兒犬に呑ませる。床の下へ這入るにも出て行くにも、如何にも人目を憚かるといふ樣子がいぢらしい。横手の生垣の外まで歸つて來ても、その邊に見馴れない人が居ると、すうつと避けて何處かへ行つて了ふ。家内の人だと、ちよつと立止つて顏色を窺つた上、頭を地にすりつけるやうに垂れて這入つて行く。すると、待ち兼ねたやうに、奥では兒犬のあばれる物音が聞える。

全體から言つて兒犬の發育が遲いのは、乳が不十分なからであら

う。可なり日數がたつても出て來さうにない。其のうち或る天氣のいゝ日に、初めて一番大きい奴が縁側の下まで出て來た。すると親犬は恐ろしい權幕で、その兒を奥へ咬へ込んだ。浮かり外へ出て、人目にかゝると危險だと思つてゐるらしい。其の後もさういふ樣子がしば〳〵あつた。そのたび毎に、兒犬はけたゝましい聲を立てて鳴いた。

兎角するうちに、三疋とも可なり大きくなつて、母親の留守中は庭へ出て遊ぶやうになつた。併し親犬が歸つて來ると、慌てゝ床下へ駈け込んだ。もうよからうから、みんな追ひ出して床下を圍はうかと言つてゐると、或日の夕方、一番大きい兒犬を一つ連れて、親犬は出て行つた。小さい二疋は縁下で鳴いてゐる。何うしたかと思

つてゐると、しばらく經つて親犬ばかり歸つて來て、今度は二疋の兒犬を連れて同じ方角へ駈けて行つた。見ると人家を離れた向ふの檜葉垣の根に先の一疋が待たせてある。そこまで駈けて行つて、親子四疋一緒になると、さも嬉しさうに纏はりながら、親犬が先に立つて、戸山學校の方へ曲つた。そして野犬の畫の隱れ場である其處の藪へ姿を沒した。ちやうど夕暮時であつた。

それきり彼等は歸つて來なかつた。

（終）

大晦日

寒い雪まじりの風がベルリンの街を吹き白ませた千九百四年の大晦日の夜であつた。私とポーランド人のT君とは、十一時過に下宿の裏通から明るいフリードリッヒ街へ出た。戸外は零度以下六七度といふ寒氣である。二人とも外套の襟を深く立て、時々まだちらついてゐる雪を帽子の廂に受けて、無言のまゝ並んでウンター、デン、リンデンの廣い通りへ曲つた。たゝきになつた路の雪は消えてゐるが、中央の菩提樹林の根がたには、白いものゝ吹き寄せられたのが、強い電燈の光に反射してゐる。枯葉の落ちつくした菩提樹の枝も幾

らか白んでゐるやうである。通りの店は、大抵もうしまつてゐて、見る限り電燈のみが明るく、絶えず流れて行く人影の列が黑く小さく見える。唇の筋肉まで凍ついたやうに、通行人の話聲が途斷てゐる。するとT君がだしぬけに、

「何處のカフェエへ行きますか」

と聞いた。其の聲が馬鹿に大きかつた。

「Kはどうです」

「ぢやKへ行きませう」

一廻りして其のカフェエ店の邊まで來ると、さすがに景氣づいてゐる。角店の二方の硝子戸には、室内の花やかな光線が溢れて、暖かな空氣の濕りを見せてゐる。戸を押して這入ると外の寒さと對照

して、温室に這入るやうである。ビールの香ばしい香が鼻を衝く。一階の大廣間は客で一杯になつてゐる。賑やかな話し聲笑ひ聲が渦卷いてゐる。給仕人の案内で、やつと片隅の方に席を見出だし、ビールを誂へて腰をおろすと、間もなく大形のコップに見事に泡の溢れたのが二人の前に並んだ。コップを擧げ、眼と眼を合せて、プロジットを口の中で言ひ、一息に半分近く吸ひ乾して、始めて落ついた氣持になる。初のうちは周圍の人々もこちらを氣にし、こちらも周圍を氣にしてゐたが、何時か平氣になつて、二人は二人きりの天地になり、傍の事などは忘れて了ふ。抑へてゐたT君の話聲が段々太くなつた。

T君は三十歳を超えてゐるがまだ獨身で下宿住である。ベルリン

大學に籍を置いてから七年だといふが、一向に卒業しやうとも思はない、年々色々の講義を三つ四つ宛選んでは聞いて、年を取るのも知らないでゐるといふ風である。此人の聞く講義の範圍の廣いのは驚くべきもので、史學、工學、文學、法律、經濟、哲學と、あらゆる方面にわたつてゐる。私と知り合ひになつたのはヴエルフリン教授の美術史の講義の時であつた。併し段々つき合つてゐる内に、此の人の比較的多く語るところは工學方面の題目であることが統計的に分かつた。父の家はポーランドで何かの機械業を營んで居るのだといふ、是と同時に君の最も好むところは哲學上の話であることも知れた。たゞ是等の題目に一貫して渝らないのは例のポーランド氣質である。話が段々調子づいて來ると、終りは屹度祖國の時事問題

になる。今まで活氣に乏しかつた顔が何となくセンチメンタルな光を帶びて、聲が太く沈んで來る。今夜もT君の慷慨談が繰返された。

「私は國籍はロシアだが、心からあなたの國に謝する。我々に代つて敵を討つて下すつて、實にありがたい。私の國では、義勇兵を募つて、そつとあなたの國へ出かけようといふ計畫を立てた人もあります。此の精神で、我々一代に行かなければ、子孫に傳へても必ず獨立の目的を達しなければ已まないのですからなあ」

「私の國でも旅順がまだ落ちないので弱つてゐるやうです」

「さうですか、旅順は一體何のくらゐの港です」

「何のくらゐと言つて、今精確には記憶して居ませんがね」

「何うしてゞす、あなたは地理は好みませんか」

「いや、好ないといふ譯でもないが」
「ぢや、地理は修めませんでしたか」
「いや、修めるは修めましたが、もう大分前の事ですから」
「併し妙ですね、日本人が旅順の地理を記憶しないなんて」
「近來まるでさういふ方面に注意を拂はないものですからね」
「へえ、戰爭に注意を拂つてゐませんか」
「戰爭には注意してゐますが、私のやつてる方面がまるで違つてゐる爲に、旅順の地理まで調べる程の用意を持たなかつたのです」
「成るほどね」
と言つたが、腑に落なかつたらしい。二人ともしばらく無言でゐたが、言合はしたやうにコップに手をかけて、餘りのビールを呑乾し

た。傍も大分すいて來たやうである。T君は一段聲をひそめて、
「今までに僕等の友人で監獄にぶち込まれた奴なども可なりあるが、一體このドイツといふ國が怪しからんのですよ」
「けれども、君等は皆斯うやつて、此の國へ留學に來て自由の空氣を呼吸してゐるぢやありませんか」
「そこですよ君、この國は實際怪しからん國です。一方では斯うして我々に盛に自由な思想を吹き込んで呉れるでせう。我々が進歩した思想を懷き得るのは全く此國のお蔭です。所が一方では其の反對のことをやつて居る。今日ヨーロッパで最も多くロシアの專制政治に同情して其惡政を助けてゐるのはこの國です。我我が容易に自由を得ないのは、ドイツが與つて力あるためだ。實に怪しからんぢや

ありませんか、君等もドイツを信用してはいけません」

T君の顔には血の色が漲つてゐる。時計を見ればもう十二時近くである。

「さあ君、外へ出て見ませう」

と勘定をすませて市街へ出ると、ウンター、デン、リンデン街とフリードリッヒ街との切りちがつた辻を中心に、群集は四方から潮のやうに押しかけてゐる。そこに立つてゐる大時計が十二時を打つのを合圖に、新年を迎へて歡呼の聲を揚げるためである。T君も私も押され〳〵て時計臺に近い所まで來ると、つい今まで國事を談じて慷慨に堪へない樣子であつたT君は、もうけろりとして、愉快さうな顔附で群集と共に新年の第一時の始まるのを待つてゐる。寒い風

はしきりにリンデンの梢を鳴らしてゐる。すると忽ち群集の前列から

「プロージット、ノイヤール」

といふ叫び聲が起つた。全群集がどよみを作つて之れに應ずる。遠くの町でも、あちらにもこちらにも同じ叫び聲が揚がる。そして人人は暫く波のやうに動搖した後、次第々々に散らばつて行つた。勿論T君は帽子を打ちふり、飛び上り躍り上つて、幾度か「プロージット、ノイヤール」を叫んだ。そして得心が行つたといふ風で私を顧みてにつこりした。

歸りは亦無言のまゝで、フリードリッヒの通りから暗い横町へ曲り、しばらく行つて私の下宿の前で別れた、T君が兩手を外套の隱し

に押し込み、蝙蝠傘を同じく胸の隱しにぶらさげたまゝ、寒さうに首を縮めて大通りの薄暗い所を辿つて行く後姿が、淋しさうに見えた。

私が大戸を明けて建物の中へ這入らうとすると、町の向側を通つてゐた男と女の歩きながら接吻する口音が、無樣に聞えた。

旅順の落ちたのは其元日である。

（終）

一面

「おやお隣りの奥さまで入らつしやいますか。さあ、まあ、どうぞ。いゝえ御同樣でございますよ。先刻はまた澤山に頂戴物をいたしまして。何分御懇意に願ひます。是まで何ちらにお住まゐで入らつしやいました。あの、仲の町で、さやうでございますか、いゝえ、結構でございますよ。あの邊は閑靜でございましてね、さやうでございますね、電車の御便利はこちらの方が宜しうございますよ。矢張りあの、お勤で入らつしやいますか。あ、日本橋の方へ。私ごもでも京橋の會社に勤めますので、何ういたしましても、電車の便がよ

ろしうございませんとね。もつと奥ですと幾らもよい家がございますけれど、此の邊になりますと、貸家が全く少なうございましてねえ。宅なぞでも、もう少し廣い、せめて一軒建の家に越したいと、始終さう申して居るのでございますが、てんで此の邊には貸家がございません。あの角のでございますが。宜しい家のやうでございますね。私どもでも、借りやうかなんて申したのでございますが。いゝえ、まだ中は見ないのですよ。便利さうでございますけれど、何だかだゞ廣くて、構へばかり大きいものですから、小人數だと却つて淋しいからなんて、宅でさう申しましてね。なに家賃はさほどでも無いのでございますよ。二十五圓で敷金三つとか申しましたよ。それは何ういたしましてもね、此家などに比べますと三倍の餘でご

ざいますけれど、其の割に綺麗な譯ぢやございませんよ。少し引込んだ場處ですと、あれ位の家は十圓少し出るくらゐで幾らも借りられるのでございますよ。宅でおつき合ひして居ります方などで、立派な方でも、大抵はそんなものでございますが、此の邊は場處が上等な爲に、其の方へ差つ引かれて了ふのでございますよ。割損でございますわね。

さあどうぞ、奥さま粗茶でございます。あいにく、お茶菓子を切らしまして。宅がいつも、榮太樓の甘納豆を好で取つて參るのでございますが、今日はちやうど其れを切らしたのでございますよ。

いゝえ、ちつとも邪魔ぢやございません。此れはもう、何日でもいゝ仕事なのですから。手前どもですか、いゝえ、別に他樣の仕事

ろしうございませんとね。もつと奥ですと幾らもよい家がございま

を致す譯ぢやないのでございますけれどね、據なく頼まれますもの
ですから、つひそれからそれと廣がつて、お斷りしきれないのです
よ。
木綿物は肩が凝りましてねえ。はい、あちらの方は宅のでございます。いゝえ御覽になる程のものぢやございません。えゝ、ほんの少し、綿が這入つてゐるさうですけれど、本物と四五圓しか違はない位ですからねえ。並の綿絹ですと、三圓か四圓しか致しますまい？
まあよろしうございます。主人はよく外へ廻るものですから、歸りの遲いことが多うございますよ。いえ、おつき合ひばかしでも無いのでございますが、仕事の都合でございましてね。おつき合ひと

申しますと、此の節はもう、極つて精養軒や富士見軒で、西洋料理も飽々したと申して居ります。
手前どものですか、あの……保險會社でございます。はい、あの……いゝえ、外勤の方でございます。
まあ、噂といへば影で歸つて參つたやうですよ。
おやお歸り遊ばせ。お疲れでしたらう。こちらはね、お隣りへ越して入らしつた奥さま。頂戴物をしましたよ。今日は外へお廻りならあちらの方の服を召してらつしやるとよかつた。是れは全くの仕事着で、餘りひどくなつてますからね。おや奥さま、お歸りでございますか。どうも失禮をいたしました。いづれ又後ほどお伺ひいたします。さやうなら。

……………………ちよいと〳〵、お豆腐屋、一丁やつこに切つてお呉れ。

（終）

2923

大正二年五月廿五日印刷
大正二年五月廿八日發行

（定價金五拾錢）

著者 島村抱月
府下戸塚村字諏訪六十五番地

發行者 植竹喜四郎
神田區佐久間町四ノ廿三番地

印刷者 佐藤保太郎
京橋區新榮町一丁目廿一番地

製本者 福神製本所
京橋區南紺屋町廿四番地

不許複製

發行所
東京市神田佐久間町四丁目二十三番地
振替東京一二九五三、電話下谷三四一九
植竹書院

現代傑作叢書第一編

正宗白鳥著

心中未遂

容内

心中未遂

脚本白壁

新刊

大正新年第一の傑作として著者近來の名品として又著者が女性を描きて尤も成功せる作として評價されたるもの。近來益々圓熟の境に入りて文壇第一人の稱在る著者の筆致は渾然として無縫の天衣の如く哀れ優しき女性を遺憾なく描盡して讀者をして思はずホロリとさする處正に大正文壇の偉觀なり。白壁は著者が多大の抱負を以て筆を染めたる脚本の處女作。

現代傑作叢書第三編

岩野泡鳴著

ぽんち

容内

ぽんち

巡査日記

非常時

近刊

閻魔の眼玉

泡鳴詩集、長篇小說放浪發展、論文半獸主義新自然主義等の著者で在る氏が最初の短篇小說集で在る、東京朝日新聞のぽんち評に『近來稀に見る佳篇である。(中略)泡鳴氏はグン〳〵と人生の深い處へ入つて行く恐ろしい筆力を此篇で示した自然主義も此處迄で行かなければ駄目である』とある。其他の三篇皆著者自ら從來の作中より最も自信在るものとして選び出されたものである。

近刊　四六版　總クロース
美本　定價未定

歷史小說四種

楢の一葉	（執筆中）文學博士幸田露伴	
木花咲耶姫	（執筆中）	武林無想庵
楊貴妃	（脫稿）	藤井伯民
クレヲパトラ	（脫稿）	西田廻瀾

文壇の老宿露伴先生文壇の不振と沈滯とを悲しみ從來所謂歷史小說の舊套を脫して新たなる主美と主張の下に新進の作家若干名を率ゐ斯壇に獅子吼を試みんとす、本書は實に其第一聲なり。平凡なる日常生活の記錄を指して文學なり小說なりと稱し、狹隘なる趣味の下に讀者の嗜好を律せんとする今の文壇の風潮に嫌焉たるの士は刮目して本書の出づるを待たれよ。